
宇宙檸檬

木下 汰我

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

宇宙檸檬

【Nコード】

N4580T

【作者名】

木下 汰我

【あらすじ】

雑貨屋『宇宙檸檬』の主人、黒髪の青年 紀伊呂 くえんは最弱をもつとくに幻想郷の住人として生きていた。タバコを吸い、酒を飲む。そんな日常を過ごしていた。

いつもの日常

幻想郷、人間と魑魅魍魎が共に生きる場所。天狗や河童が支配する山、妖精達が舞い踊る湖、瘴気に満ちた森、そんな信じられない世界だ。そんな世界で人間が普通に生きていける訳がない。現に人里と呼ばれる集落に肩を寄せ合って生きているのが現実だ。その人里にも妖怪の類は現れるのだが、ありがたい事に人里では人間への手出しは禁止らしい。人里では、つまり人里の外、特に夜なんかに外に出て妖怪に食われても知らないって事だ。それでも有難い。それなりに人間と魑魅魍魎は友好的にすごせている。こちらが変なちよつかいを出さなければ、日中なら人里から出てもそうそう食い殺される事はない。このルールや世界を作ったという妖怪賢者様には一度会ってお礼を言いたい限りである、あの人のお陰で仕事も出来ているわけだし。

「なんだかんだで俺も慣れたな。この地にも」

店先でタバコを吸いながら、妖怪、人間が行き来する路上を暢気に眺めている。

当店、雑貨屋『宇宙檸檬』です。まだ開店一年のこの町では新米の店です。俺自身もこの町に住んで二年弱の新米だが、周りの商店や客とはそれなり友好的な関係を築けている。俺『紀伊呂 くん』は二年前に神隠しにあった。それまで中国地方の一都市で暮らしていた普通のフリーターだった。毎日のようにバイト先に行き肉臭くなるまでステーキを焼き、たまにホールに出て他のバイトに仕事を任せてホールを歩く、店が閉まったら社員と一緒に発注をする。そんな生活をしていた。そんな俺は神隠しにあい、この幻想郷に流れ着いたのだ。

幻想郷の説明の補足になるが、この地は俺たちがいた世界とは隔離させているらしい。博麗大結界とかいうので明治頃に。慧音先生が詳しく説明してくれたが、歴史なんか興味がない元理系男子の俺はすっかり忘れてしまっている。重要なのは明治頃に隔離されたということだ。文明が不便なままなのは我慢できる、しかし嗜好品が偏っているのが我慢できなかった。服に関しては着物が中心であるが、洋服のあり困りはしなかった。しかしキセルはあるがタバコがない酒は日本酒、焼酎ばかり。ヘビースモーカでビール党の俺には辛い世界だ。だから俺はこの店を始めた。自分の欲しい物を手に入れる為に。慧音先生の紹介で妖怪賢者の式と知り合いになり必要な物を入荷し売る。儲けの6割は渡さないとならないが、発注さえミスしなければ赤字にはならない。それに酒は売れる。この地の娯楽の中心が酒なのはありがたかった。他の酒屋と喧嘩にならないように日本酒や焼酎は売らずにビールや洋酒を売っている。他の商品のそんな感じに周りの輪を乱さないように気を使っている。お陰で商店と
はいい関係だ。

「紀伊呂、入荷の物を持ってきたぞ」

店先に中国の術師が着ていそうな服の女性が立っていた。一見だけで彼女が人間ではないとわかる。なんたって9本もの狐の尻尾が生えているのだから。

「藍さんありがとう。別に直接持ってこなくてもよかったのに。重たいし」

彼女は八雲 藍、噂の妖怪賢者の式だ。式とは何か彼女本人から聞いた事があるが、正直理解してない。俺の生活には利用出来そうになかったから。

「かまわないさ。ちょうど人里に買出しもあつた事だしな」

そう言いながら入荷品のリスト渡された。

「なら買出しついでに酢橘酒なんかどうだい？　なかなかさっぱりして美味しいよ」

「入荷した記憶はないから、君の自家製か？」

「うちの商品として最近売り始めたもの。自家製だけど、なかなかの出来だよ。売り上げも、客の評判のいいし。あと檸檬酒も。こっちはストレートで飲むもんじゃないけど、サイダーで割れば美味しいから、こっちもどうだい？」

ついでにうちの商品を進めてみる。うちの店に合わせて柑橘系のお酒にも手を出し始めている。これも酒屋のおっちゃんと仲良くなつたお陰で作ることが出来た。本当に有難いかぎりだ。

「そつだな。両方いたどころか。紫様も喜ばれるだろう」

まいど、そういいながら酒を2本包み藍にお金と交換で渡す。そして俺は店先に詰まれたダンボール3つを店内に入れ始めた。藍も買出しをする為に離れようとしていた。そして俺は聞きたいことがあるのが思い出した。

「そつだ藍さん。博麗の巫女が変わつたって話だけどまだ幼いらしいけど大丈夫なのかい？」

「ああ霊夢の事か。大丈夫だろう。幼いが才能は有るからな。それ

に大きな異変も最近は起きてない。にしてもどうした。君がそんな話を聞くなんて」

「先代の巫女にはこっちに来たときにお世話になったし、少し気になるのさ」

大丈夫ならいいと答え藍を見送った。

博麗神社。幻想郷唯一の神社でありその巫女は幻想郷のバランスを担っている。外から来た俺からしたらそれくらいしか知らないが、あそこにはそれなりにお世話になった。幻想郷に流れ着いたばかりの時、先代の巫女や慧音先生の仲介で人里で暮らすことができ、こうやって店を持つことが出来た。先代は最近病で死なれたらしく特にお礼も出来ないままになってしまった。今は弟子の子が巫女をやっているみたいだが少し気になっている、先代の恩をまだ返せてない俺からしたら。でも大丈夫なら特に気にしなくてもいいのかもしれない。

その後いつも通りに営業を行い、日が沈みしばらくして店を閉め、2階の住居スペースでつまみの川魚と酒だけという質素な晩飯を食べている。外にいた時も似たような食生活だったが、あの時はパスタがジャンクフードだった。焼き魚なんて年に数回しか食べる事無かった。そう考えると変わるものだ。昔だと魚に塩をふっただけのものがつまみにはならなかっただろう。今はこの質素な味が幸せだ。

「またそんな夕食なのか、くえん」

入り口に1人の女性が立っている。水色の髪をした美しい女性。たまにこうやって人の家に勝手に入ってくるのだ。美しい女性だから特別に許している。

「慧音先生、男の1人暮らしなんてそんなものですよ。食事なんて優先順位が低いんです」

上白沢 慧音、俺の恩人と呼べる人の1人だ。よそ者の俺に対して
も親切にしてくれた。外の、ここでは外来人と呼ばれるが俺みたい
に生きて人里にたどり着ける外来人はそうそういない。たいていは
妖怪の胃の中に辿りつく事になる。そのせいもあり町はよそ者に冷
たい傾向にある。妖怪に対しては冷たくないのにおかしな話だ。そ
んな俺の手助けをしてくれたのが彼女だ。今もこうして俺の様子を
見に来てくれる。

「なら結婚でもしたらどうだ？ お前もいい年なんだから」

「いい年だったって22ですよ。ここじゃ18での結婚も珍しくない
ですけど、外じゃまだまだ独身を楽しむ歳です」

「そんなものか。まあ今日はそんな事を言いにくたのではなくて、
付き合ってくれないか？」

そう言いながら彼女は持っていた酒瓶をあげて俺に見せた。

「日本酒ですか、苦手なんでこれでよければ付き合いますよ」

俺は近くにあったビール瓶をあげて彼女に見せた。毎度のやり取り
をし、彼女はつまみを2、3品新たに作る為に台所に向かった。

思えば女性と飲むなんて外にいた時からあったが、相手が美人、し
かも半妖だなんてこんな事なかなか経験できることではないだろう。
なんでも彼女はハクタクとの半妖らしい。彼女がこういう種族の半

妖で、どうついう経緯で今にいたったかは特に興味がないから詳しい話は聞いてはいない。しかし半分妖怪の彼女が人里で暮らし、寺小屋で教師をやり、里の守護者と呼ばれているのだ。この世界の妖怪と人間の間係を表しているような人だ。

しばらくして慧音先生が出来たつまみを持ってこちらに来了。

「そういえば妹紅はどうしたんですか？　いつもなら一緒に飲みに来るのに」

「ああ、妹紅ならいつものやつだ」

「いつもの、ね。それにしても飽きませんね。もう何百年も続けているでしょ？　彼女にとつちや数少ない生きがいなのはわかりますけど。」

「まあな。しかし本人の問題だから私たちがとやかく言うことではないだろう」

「もったいないけどな。妹紅も美人なんだし結婚でもすればいいのに」

「それこそ無理な話だろう。彼女には……」

人と人外の区別

店の定休日を利用して俺は霧の湖と呼ばれる場所まで足を伸ばした。いい釣りのスポットとして有名だが別に釣りをしにきたわけではない、ただの散歩だ。それに俺の友人と呼べるやつもここにいる。

「おいバカチルー。どこにいる？」

そいつの、俺が勝手につけたあだ名を言いながら湖の周りを歩き回る。しかし一向に出てくる気配がない。いつもなら、バカじゃないもんとかいいいながら現れるのだが。

「くれん、あの妖精ならいないぞ」

背後から呼び止められ、振り向いてみたら銀髪の少女、妹紅が釣竿片手に立っていた。

「よっ、なんだ飯でも捕まえに来たのか？」

そんなとこ、と彼女は答え俺を追い抜き歩き始めた。目的の相手がいなくて暇になった俺は彼女の後を追いかけることにした。しばらくすると、釣り場なのだろう、そこについた彼女は湖に竿を向け釣りを始めた。ここまで会話はゼロ。無視ではないだろう。彼女の性格からするに極力人との関わりをとらないための会話をしないという行動だ。

「妹紅、酷くないか？無視とか」

その性格を理解した上で彼女をからかってみる。

「無視じゃない。別に話す事がないだけだ」

「まーいいけど。にしてもチルノのやつどうしたんだ？ 大概是湖で遊んでるだろ」

「緑の髪の妖精つれて竹林にいたぞ」

緑の髪の妖精ならいつもチルノと一緒にいる彼女だろう。いつも暇で遊び好きの妖精の事だ、竹林まで遊びの足を伸ばしてもおかしくない。あそこに暇つぶしになるものなんてないとおもっが。妹紅なら暇つぶしになる連中を知っているだろうが、教えるとは思えない。しばらくしたら筍でも持って戻ってくるだろう。

「チルノいないなら湖まで足を伸ばす意味無かったな」

「お前やけにあの妖精に執着してるな」

「まっ友達だからな。けしてロリコンではないぜ」

妹紅は俺の言ったロリコンという単語が理解出来なくて首を傾げている。ロリコンなんて概念この地にはないだろうな。昔の日本なんてロリコンやホモだらけだったし。光源氏なんかカリスマロリコンだし。

「お前変わってるよな、妖精なんか友達って呼んで。外のやつは皆そうなのか？」

「さあね。ただ面白いやつだから友達なだけ。それに妖精も妖怪も関係ないだけ」

それが変わってるんだろ、と妹紅はため息をついた。たしかに変わっているのかもしれない。妖怪は人を襲う、妖精は人を惑わす。そんな相手を友達と呼ぶなんて。たしかに幻想郷の理念に沿った考えだろうが、実際はそうもいかないだろう。ただ俺が適用性があつて、妖怪や妖精の恐ろしい面を見てないからだけだから、気安く妖精を友達と呼べるのかもしれない。

「まあ、変わってるかもね。でも人間なんてものの境なんて曖昧だからね。外にや見た目人間でも中身や考えていることが化物のやつなんてさらにいたし。目の前にも人間って呼んでいいのかわからんやつがいるし」

俺の言葉に妹紅は苦虫を噛み締めていた。彼女も思うところがあるのだろう。慧音曰く藤原 妹紅は不老不死らしい。老いることも死ぬことの無い身体を持った彼女はたして人間と呼んでいいのだろうか。少なくとも外の世界なら人間あつかいはされないだろう。モルモットか化物の二択しかない。だが幻想郷という優しい世界でなら人間か化物かを選択を許されている。だからこそ彼女は辛いのだろう。人外と決めつけられたら諦めもつくものだ。しかしここでは自分で選ばないといけな。優しい世界というのは時にして残酷なのかもしれない。

「だから俺は区別が出来ないのさ。区別が出来ないから、面白いやつは友達って呼ぶことにしてるだけ」

本当はそれだけではない。チルノを友達と呼ぶのは罪滅ぼしでしかないのかもしれない。もう出来なくなってしまったことをやるための。

妹紅はそう、と呟いただけで釣りを続けている。彼女も思う所があるのだろう。死なない、老いない彼女は人間に恐れられ、かといって妖怪にもなれない。そんな中途半端だから。

「まあ帰るかな。妹紅、今度魚持って家に来いよ。昨日、慧音先生と飲んだんだけど、寺小屋の教育ってつまらん話だったから上手く酔えなくてね」

「そりゃ災難だったな。気が向いたらつまみ持っていくよ」

俺は妹紅と別れを告げ、人里に足に向けた。俺が人間がどうだなど考え、妹紅の悩みの手助けをしようなんて偽善なのかもしれない。俺がこれからいくら素晴らしいことをしても、それは偽善で罪滅ぼしでしかない。俺は逃げたのだ、この世界に。だから博麗の巫女が俺を外に帰そうとした時に、俺はここに残れるように懇願したのだ。そんな俺が妹紅に現実と向き合わせようなんて傲慢すぎる。

俺は人間だ。しかし中身はただの化物だ。この世界なら最弱でいられる、俺のなかの化物が誰も傷つけることはない。そういう意味でも幻想郷は俺にとっては理想郷だ。

半刻ほど歩き人里に着いた。門番のにいちゃんに軽く挨拶をして門をくぐる。チルノと適当に遊んで今日はすごそうと考えていたが、チルノがいない今予定なんて皆無だ。慧音には自衛の為に暇な時にでも使って、霊力の使い方の練習をしろと言われているがやる気にはなれない。そんな事したら最弱でいられなくなってしまう。里の皆少なくともお札を使えるのに俺だけ使えないという構図が壊れてしまったらここに逃げた意味がないのだ。

しかたないので近くの甘味屋で団子を買って家に帰って来た。お茶

を入れて団子を口に運ぶ。自然な甘さだ。外だったらもっとしつこい甘さだろう。こういうものを食べるとここの良さを実感できる。一気に残りの団子を口に運びお茶を飲む。そしてタバコ吸いながら寝転がる。幸せだ、こんな生活が。こんな俺が味わうべきではない幸せだ。

始まりの雨

今日も今日とて店番だ。だが外は午後から生憎の雨模様、どうせ今日は客は来ないだろうと思いつながらの店番だ。娯楽品中心の店だから雨の日にはいつきに暇になってしまふのは考え物だ。里には竜神様の石像がある。その像の目の色でその日の天気がわかる。そのせいで雨が降るとわかつている日は最低限の仕事だけして家で過ごす習慣がある。便利なものだが、客が来ないのは困りものだ。

そういえば竜神様の石像は山の河童が作ったものらしい。約70%の確立で天気を当てるなんてどんなくみだろうか。しかも像を整備している様子も見ることが無い、それ以前に河童なんか見たことがない。天狗ならたまに見かけることがあるのだが。人見知りか激しい種族とも聞いたことがあるが実際はどうなんだろうか。慧音が言うには青色の髪をしてすごい機械を操るらしい。機会があれば会ってみたい。70%で天気が当てれるのだ、さぞすごい科学力があるのだろう。俺の生活水準を上げるために、店の商品を増やすためにも。

ぼーと見ていた店の外に人影が見えた。どうもうちの店に向かってきているみたいだ。そいつは青色の髪をしていたが、俺が会いたがっている河童ではない。むしろ科学なんか無縁なただのバカだ。

「おい、くえん来たぞ」

「特に呼んでないけどな。つか商品濡らすな。今タオル持ってくるから待ってろ」

先日会うことが出来なかったチルノだ。自称最強の少し頭が可愛い

事になっている氷の妖精。自他ともに認める最弱の俺とは考え方が間逆に位置するが俺の友人と呼べる存在。

「ほらタオル。にしても珍しいなお前が人里にくるなんて。金なんか持ってないだろうに」

タオルを渡してやると髪やら身体を拭き始めた。チルノが動くたびに回りに冷気が散って気温が下がっていく。

「ああ、金がなくても来る妖精もいるな。こそ泥の三人組が」

「あたいは最強なんだから、こそ泥なんてせこいことしないし」

こそ泥がせこいならせこくない方法は強盗か、と聞きたかったが聞いたら本当にしそうだ、主に俺の店で。

「そんなことより、すげえことがおきたぞ！！」

妖精が言うすごい事なんてあんまり期待は出来ない。基本的に頭が平和な妖精だ、人食い蛙が出たとかそんなところだろう。いや、そとだったら十分すごいことだ。むしろ世紀の大発見だ。

「湖の島にでけえ家があらわれたんだ。しかも真っ赤な！！」

これなら幻想郷でも人食い蛙のほうがすげえ事だ。真っ赤な家なんて大して面白みがない。ましてや廃墟に住む騒霊の三姉妹がコンサートする世界だ、またおかしいな廃墟が増えたって面白みなんてない。

「くえん探検にいこうよ」

言うと思った正直行きたくない。確かに雨で客は来なくて暇ではあるが、いちいちそんな所には行きたくない。第一に安全かどうかからない場所に好き好んで行くわけが無い。

「いやだ。そんな所行くか」

「なんだビビってるのか？ 大丈夫、なんたって最強のあたいが一緒なんだからな」

「じゃ最弱の俺と合わせて普通だから却下だ。そんなに行きたいなら大ちゃんといけばいいだろ？」

「なんか大ちゃんも行きたくないとか言ってるの」

大ちゃんとは大妖精と呼ばれる緑色の髪の少女だ。妖精は自然の具現といえる存在だ。その彼女が行きたくないというのは本当に危険な場所なのかもしれない。彼女なら自然の変化から危険を察知してもおかしくはない。一方チルノは妖精にしては強い力を持っている。仮説だがそのせいで妖精から外れ妖怪に近い位置にいるのかもしれない。そのせいで自然の変化に対して鈍感になっているとも考えられる。だとしたら性格からしても1人でもその家にくいだろう。1人で行って怪我でもしたら後味が悪い。なら一緒にいつてやるべきなのかもしれない。最悪の場合は俺の最弱を理由にして逃げればいいだろう。

「じゃあない、行つてやるか。客もこないだろうし。でも俺が危険だと感じたらすぐ帰るぞ。俺はお前と違って最弱なんだから」

店を閉めて、チルノの案内で話の家が見える場所まで着いた訳だが、まず家ではない。屋敷とか豪邸と呼ぶべきだ。そして真つ赤と聞い

ていたが思った以上に悪趣味だった。昔の貴族が住んでいそうな大きな洋館で時計台まである立派な作りだ。本来なら綺麗と呼べる作りが赤色のせいで全て台無しだ。赤じやない箇所がない時計台の文字盤まで赤色だ。少し喉にこみ上げてくるものがあるが唾液で無理やり押し戻した。

正直もう帰りたい。思ったより雨が強くてブーツは泥だらけになってしまったし。それよりも周りに誰もいないのが異常だ。妖精はまだわかる。怖くて棲み家に隠れてしまっているのだろう。それでも天狗までいないのはおかしい。天狗という種族は噂好きで新聞まで発行しているのだ。だからこんなおかしなものが現れたら出てくるはずだ。普段なら本当にくだらない内容でも記事にしているのに。正直俺は天狗に遭遇するのに期待していた、たぶん俺の知り合いの新聞記者もここにいと。彼女の新聞の数少ない購読者の俺に話しかけてくると期待していた。しかし一向にその気配はない。

数日前藍が言った言葉が頭を過ぎる。異変、もしかしたらこれは彼女が言っていた異変なのかもしれない。だとしたら大丈夫なのだろうか、ここ数年大きな異変は起きていないらしい。なんでも妖怪が弱体化し始めて大きな異変を起こす力をなくしてしまったらしい。おそらくこの建物は俺がいた外の世界から来たものだろう。妖怪たちは外から来た異変に対抗出来るのだろうか。そして異変の解決を専門にする博麗の巫女はまだ幼く、代替わりしたばかりという。彼女はこの異変に対抗出来るのだろうか。俺の頭の中で出てきた答えはN oだ。妖怪も巫女もこの異変に対抗出来ないそう答えがでてしまった。

この世界が変わる。そのことに俺は恐怖を覚えた。外来人の俺は危なくなったら逃げればいいのかもしれない。しかし俺には帰る場所などないのだ。俺は外から逃げてこの理想郷に逃げ込んできた。こ

こ以外にもう帰る場所はない。恐怖でしかない、この理想郷が壊れてしまうことが。

「くえんどうしたんだ？ 急に黙り込んで」

チルノの声で俺は現実に取り戻された。あれこれ考えても始まらないだろう。今はこの悪趣味な洋館が危険なものかを調べるのが優先だろう。かと言って俺が何が出来なのか。子供でも発動出来るお札さえ使うことができない俺が出来ることあるのだろうか。武器といえる物は護身用の無駄にゴツイナイフ1本、あとはチルノ頼みの状況、これは相当気合を入れて挑むべきなのかもしれない。

開戦

俺たちは思ったよりも簡単に屋敷の中に入り込むことが出来た。内装も赤一色である。ちよつとした調度品さえも赤色だ。それは誰かの血をばら撒いたかのように俺の目に映りこむ。こみ上げてくる吐き気を押さえながら慎重に足を進めていく。入る前はチルノが静かに侵入なんか出来るか心配だったが、流石は悪戯好きの妖精だ。忍び込むという行為も楽にこなしている。よく神社に忍び込んで遊んでるというのは伊達ではないようだ。そして空が飛べるのは便利だと再実感してしまう。飛んでいれば足音の心配なんてしなくてもいいのだから。こんなことなら飛ぶ練習だけでもすればよかった。もつともお札を使うのと違って空を飛ぶ行為は一部の才能がある人間しか出来ない行為だ。俺みたいな最弱ができると思えないが。

「それにしても誰もいないわね。ちつとも面白くないじゃないの」

「俺は有難いけどね。お陰で侵入もできたんだから」

「でも、せつかくの冒険なのに面白みがないし、少し暴れてやれば誰か出てくるかな？」

そんな事をされたら出てきたやつと、ちよつと命がけな鬼ごっこに発展してしまう。それにしてもこのままだと侵入した意味がないのは確かだ。ここに人、もしくは妖怪が住んでるのは確かだろう。あきらかに手入れが行き渡っている。

「どうするかな。なあ最強のチルノさんはどこが怪しいと思う？」

「もちろん上に決まってるわ。こんなでかい家に住むやつは上の方

で踏ん反りかえってるはずだわ」

なんともチルノらしい単純な考えだ。バカと煙は高いところが好き、それに付け加えるなら権力者も高いところ好きなものだ。あきらかに漫画やゲームのイメージでしかないのだが。

「じゃあ上を目指して進みますか」

チルノの返事を背後に上に向けて足を進めていく。それにしても壁や床、天井まで赤いと感覚が狂ってしまう。そえに色があからさまに血の赤だ。この住人はよっぽど血が好きなのだろう。それならイカ好きの変人ではないことは確かだろう。あいつらの血は青色だし。考えれるのは気が狂った人間か、妖怪。血が好きな妖怪なんて俺の浅知恵では吸血鬼ぐらいしか思いつかない。思えばこの屋敷にはあまりにも窓が少ない。吸血鬼といえば日光の下では行動が出来ないのが有名だ。そう考えると適当に考えている仮説が当たってしまいそうで怖い。キリシタンではない俺はもちろん、チルノも十字架なんか持ってないだろう。

「なあ、なあてば」

「なんだよ。こっちは考え事で忙しいんだよ」

「あの部屋から声しないか？」

チルノが指差す先には大きな扉があった。さしずめ広間でもあるのだろう。チルノに手で付いてくるように合図し、慎重に音を立てずに扉に近づき耳を当てて中のようなうすを探る。中からは確かに声が聞こえてきた。おそらく3人、全て女性だ。落ち着いた幼女と、知的な少女、凛々しい女性、声のイメージからはこんな風に取りれる。

チルノはワクワクしながら話を聞こうとしている。俺はビクビクしながら慎重に聞き漏らしのないように意識をドアの向こうに向けた。

「咲夜は大丈夫よ。紅魔館ごところらに飛ぶのに力をだいぶん使ったみたい。今は小悪魔が様子を見ているわ」

「流石咲夜さんですね。屋敷にも被害は無いみたいです。妹様も無事です。ただいつも通り暇にしていますが」

彼女たちは外から咲夜とやらの力の使いこちらに来たみたいだ。そして小悪魔という単語から察するに知的な少女は魔術師かなにかだろう。そして報告を聞いている幼女がお嬢様で、一番偉い人物だと予測できる。

「咲夜には何かご褒美をあげないとね。でパチエ？ この幻想郷がどんな所かわかったかしら？」

「そうね、簡単に言うなら人間と妖怪が共に暮らす温室つて所かしら。そのせいで妖怪の存在意義が薄れて弱体化してるみたいね」

「嘆かわしいわね。人間や一部の妖怪に飼いならされてるなんて。やっぱり私が動くしかないかしら」

「お嬢様、私は反対です！ なにもここに来てまで争い事なんて……」

「美鈴、知ってるでしょ？ レミイが曲がる訳無いわ。それにこのまま妖怪が弱体化してしまったら私たちがここに来た意味がないわ」

「ふふふ、なら決まりね。幻想郷を支配するわよ。この夜の王レミリア・スカーレットが。ああ、でもその前にフランが暇しているのよね？」

「あらレミイ良かったじゃない。ちょうどドアの向こうに新しいおもちゃがあるみたいよ」

聞きたいことは聞けた。俺はチルノ手を掴み走り出した。行きとは違い足音なんか気にせずに全力に近いスピードで。明らかに彼女が言ったおもちゃはいい意味ではないだろう。その言葉の奥には明らかな死が見えている。逃げなければ死しか待っていない。

「ちよつとくえん逃げなくてもいいだろ！？ あいつら悪党なんだろう、ならここでやつつけない」と

チルノは暢気な事を言って、戻ろうとするが力任せに付いて来させる。

「うつせえ！！ いいから逃げるぞ。あいつらには勝てねえよ俺の最弱の本能がそう言ってる！！」

後ろからドアが開く音がする。あちらは気楽なものだ。妖精と普通以下の人間が相手なのだから。

「人間ごとときと妖精が逃げれると思ってるの？」

気が付いた時にはすでに大きな蝙蝠の翼をもった少女が並走していた。俺は速度を殺して、ごめんと叫びながらチルノを窓に向かって投げつけた。窓は割れチルノは外に飛ばされた。

「人里に行つて、さつき聞いた事を慧音先生に伝える！」

チルノなら大丈夫だろう。あいつはしょっちゅう喧嘩して、他の妖精に波動拳みたい技を食らっている。窓を突き破ったぐらいならケ口つとして飛んでいけるだろう。

「あら、酷いのね。女の子を窓から放り投げるなんて」

背後にたぶんレミリアだろう、彼女が立っている。暢気なものだ。そして明らかに格下の相手に対する余裕さえ感じれる。

「俺は悪党だからね。それよりもいいのか？ 俺よりもあいつを追いかけても？」

「必要ないわね」

「本当は追いかけたいんだろ。でも雨だから出来ない、違うか夜の王」

「あら私が吸血鬼つてわかつてるの」

後ろを向きながら、腰のホルスターから無駄にごついナイフを抜き正面に構える。正直言つてこんなものでどうにかなる相手ではない。それでも俺の心を落ち着かせてくれる。

「そんな目立つ羽があれば誰でもわかるさ。この窓の少ない屋敷のつくりからもね。吸血鬼なら雨の日の外に出れないって予想が合つたつてよかったよ」

「なかなか賢いのね、それに面白いわ。そのナイフから血の匂いが

するわね、あなた人を殺めたでしょ。それも1人や2人じゃない、何十人も。幻想郷に暮らす妖怪以上に貴方は妖怪らしいわ。でも所詮は人間、吸血鬼の私にナイフ1本で勝てるかしら、殺人鬼さん」

彼女の言葉が終わると同時に、なんの躊躇いもなくナイフを振りレミリアの首を切りつける。血が間欠泉のようにあふれ出る。返り血で体中が真っ赤に染まる。その光景に俺もレミリアも動揺はしない。両者にとってこれはあまりにも見飽きた光景なのだろう。

- 幕間 -

喉を切られるという本来は致命傷の傷だが、吸血鬼の再生力の前では、大量の血がレミリアに視界を一瞬だけうばっただけに終わった。しかしその一瞬の間に目の前にいた男は消えていた。目の前にはさつき妖精を使って割った窓がある。ここから飛び降りたのだろう。そうしなければただの人間が一瞬姿を消せる訳がない。今彼女がいるのは建物の三階だ。流石に死にはしないだろうが、怪我はしているだろう。しかし窓から覗いた地面には男の姿はない。ここから落ちてなお彼は逃げ出したのだ。

レミリアは薄っすらと笑みを浮かべていた。今までに無い経験だったのだ。今まで何百ものヴァンパイアハンターを返り討ちにしてきたが、彼のように躊躇いのない者は誰一人いなかった。彼女の姿は10歳前後の幼く美しい姿だ。その実態が500年生きている凶悪な吸血鬼だと知っていようが、誰しもがこんな姿の彼女を殺すことに躊躇いを持っていた。しかしあの男は違った。今まで出会った敵達の誰よりも弱く、最弱といえた。だが彼はこの姿の彼女に対して何の躊躇いもなく切り付けたのだ。それはどんな妖怪よりも妖怪らしい行動だ。

彼女は笑っていた。これからするのはただ退屈なだけの侵略だと思

つていたが、案外楽しいものになるかもしれないと期待をして。また男に会えると感じていた。それは運命で決められた絶対だと。そして次は名前を聞くのを忘れないようにしよう、そう考え笑っていた。

戦闘準備

なんとか生きて人里の近くまで辿り着く事が出来た。まさか幻想郷に来る前に3階から突き落とされたという稀有な経験が生かされるとは思っていなかった。あの時は散々ばこに殴られてから突き落とされたが、今回は怪我も無く、吸血鬼の血を浴びて自分から飛び降りれたのが幸いした。吸血鬼の血には高い治癒力があるらしい。思いつ切り昔漫画で呼んだ知識だったが本当のことで助かった。何箇所も骨折したが直ぐに回復してくれた。もし血に治癒力がなくても走って逃げるつもりだったので、どちらでもよかったが。前の時は骨折した状態で走った逃げたのだ、今回も出来ると踏んでの行動だ。

吸血鬼を殺すつもりで一太刀浴びせたが、あの程度では死んでいないだろう。それでも傷が回復するまでは足止めにはなるだろう。1日か2日か、流石に半日以下は無いと思う。とにかくこの間に人里まで行って対策を練るのを手伝わないといけない。チルノが慧音に吸血鬼の侵略計画のことを伝えてると思うが、バカだから上手く伝えれてないだろう。しかし俺の意識はあの時のように、突然落ちていった。

俺は実家の自分の部屋にいた。そしてこれが夢だと直ぐに気が付いた。ここはもう存在しない場所なのだ。俺が壊した、俺が壊したはずの場所なんだ。俺はあの時と同じように部屋を出て階段を下りて居間に向かった。やっぱり目の前にはあの光景が広がっていた。吐き気が込み上げてくる。たまらず胃の内容物を全て床に撒き散らした。俺は再度その光景を眺め、そしてあれを見て俺の体温が下がっていくのを感じる。

気が付いたら俺は布団の中で横になっていた。俺の部屋ではないが、よく知っている場所だ。俺が人里に来てからしばらくの間お世話になっていた慧音の家の一室だ。

まだ身体が寒い。あんな夢を見た後だからしかたはないだろう。しかし一向の体温があがる気配がない。むしろ体温が下がっていくばかりだ、特に布団の中が。そこでやっと気が付いた。布団の中に違和感があることに。ため息と共に布団をめくるとチルノと一緒に寝てるではないか。彼女は氷の妖精だ。そして普段から冷気が駄々漏れの状態である。これは凍死しなかっただけでも有難かったのかもしれない。

服はあの時着ていたものではなく、浴衣になっていた。それもそうか、あの服は血まみれになっていたのだから。チルノを起こさないように立ち上がり慧音を探すことにした。御礼と今の状況を聞くために。

思ったよりも簡単に慧音を見つけることができた。彼女は玄関先で里の人間に指示をだしていた。邪魔をしないように壁にもたれ話が終わるのを待っていると、数分で終わり、里の人は各々の行動の為に動きだした。

「悪いな。病人に気を使わせてしまって。しかし今は少しの時間も惜しいのだ」

「まあ事情はわかるのでお気遣い無く。てかすみません。なんかチルノ共々迷惑をかけたみたいで」

「それこそ気を使わないでくれ。君とチルノのお陰ですばやい行動ができたのだから」

俺は3日間寝ていたらしい。その間の事を慧音が教えてくれた。

チルノが先生の所に来たときは誰も信じていなかったらしい。いつもの悪戯の一環だと。悪人が幻想郷を侵略しに来たなど信じはしないだろう。しかしチルノの慌てようと、俺が里のどこにもいないことによつて俺の搜索が始まることになったのだ。俺はすぐに見つかった。そして血まみれの俺の姿を見て事態は動き出した。里の自警団による警備が始まったのだ。そして何が起きているのか完璧に理解したのは次に日の夜であった。吸血鬼、レミリア・スカーレットが幻想郷への宣戦布告を行ったことによつて。

「現状はこんなところだ。今は妖怪の山を攻め落とそうと彼らはしている。その片手間で里にも兵を送り込んで。妹紅や少数の妖怪、妖精のお陰でなんとかなつてゐるが時間の問題だろうな」

「待つてください。おかしいです。紅魔館にはそんな戦力は無いはずです。侵入した時には……」

「たしかに紅魔館の戦力は吸血鬼に魔女、赤髪の妖怪、あとは魔女の使い魔程度だ。だがな幻想郷の妖怪が裏切ったのだ。今の自由に人間を襲えないことに不満がある者たちが」

そんな事を言つたら河童や天狗以外のある程度以上の力を持っている妖怪は裏切っているだろう。いくら河童、天狗が一大勢力といえ今勢いがあるのは紅魔館陣営だ。妖怪の山が落ちるのも時間の問題だ。

「かといって諦める訳にはいかない。このままあいつらの良いようになる訳にはいかない」

俺から見ても慧音は焦っている。それもそうだ、俺が生きている時間よりも長く彼女はこの里を守ってきた。それがたかが数日で崩れ去ろうとしているのだ。焦らないわけがない。

「ひとつ可能性があるとしたら、相手のトップ、レミリアをどうにかするって事です。妖怪が弱体化している今幻想郷を裏切れるのは吸血鬼のカリスマに当てられたかにすぎない。ならレミリアをどうにかしたらこの異変を止めれます」

「だがくえん。今山も里も守りに必死だ。とてもトップを狙う余裕はない」

確かにそうだろう。だが戦力を割く必要はない。方法は2つある、そして俺にしか出来ないことだろう。それに失敗してもどうにかなる、まだ肝心な役者がまだ舞台上上がっていないのだから。役者が出揃う前にけりが付くのが一番いいのだろうが。

色を無くした決意

俺が目を覚ました晩から戦闘は過激になった。里の人は妹紅と慧音先生中心に、妖精はチルノと大妖精を中心に戦い何とか戦況を保っている。夜が明けるまで持ち堪えれば何とか今日も乗り切れるだろう。そんな一大事に俺は戦地から遠くにいた。俺には何も出来ない、簡単なお札さえ使えない俺が戦場に立つても足手まといになるだけだ。俺に出来ることなんて雑貨屋の店主がナイフを振り回すだけだ。

そんな役立たずな俺は1人で行動していた。俺を戦力として動かすには一対一の状況に持ち込むしかない。それはそうだ、あんな霊力や妖力の弾が飛び交うなかナイフ1本で出来ることなんてない。せいぜい的になるだけだ。戦闘の基本は数。その観点から見ても俺が一対一で敵を倒して行っても意味が無いだろう。だが例外もある、例えば敵のリーダー格だ。そいつさえ叩けば相手の士気を削ぐ事になる。それが最弱の俺が出来る唯一の戦い方だろう。本来ならそれは博麗の巫女の仕事だが、まだ幼い彼女には無理だろう、だから巫女の代わりを俺がすることにいた。それに里には戦力を割く余裕はないのだ、戦力外の俺が動くしかない。

「と来たのはいいが、やっぱり上手く行く訳ないよな」

木の陰から双眼鏡で紅魔館の様子を見ている。そこには1人、赤髪の女性が門の前に立っている。恐らく門番だろう、しかも妖怪っぽい。一対一でも勝てる訳がない。実際は戦わなくてもいいのだが、戦闘になる可能性を考えると恐怖でしかない。俺の戦闘の勝利条件はレミリア・スカーレットを交渉のテーブルに着かせることだ。本当に神に仕える巫女の代行らしい平和的な行動が目的だ。しかし交渉に行き着くまでに戦闘になる可能性は大いにある。このまま幻想

郷を支配したほうが明らかに紅魔館側には利益が有るのだから。

「第一プランが失敗した今これしかないんだけどな」

ここに来る前にすでに行動を起こしていた。まだ戦闘に参加していない戦力を味方に引き込み戦況を引っくり返すというものだ。それによって相手を交渉のテーブルに着かせやすく作戦だった。事は数時間前に戻る。

久しぶりに来たここは相いも変わらずジメジメしていた。それもそうだここは地下でもっと下って行けば旧灼熱地獄があるのだから。周りのちよっとした水分は蒸発して逃げ場の無く籠っている。ちよっとしたサウナみたいなものだ。絶対にチルノとは一緒に行くことは出来ないだろう。

「おっわざわざ出迎えかい、さとりに勇儀の姐さん」

地下にある旧都近くの道に彼女たちが立っていた。2人とも地下の有力者だ。怨霊や灼熱地獄の管理をしている地霊殿の主、古明地さとり、地底の妖怪たちのまとめ役でもある鬼の星熊 勇儀。

「まあそんなとこだ。思ったより元気そうにやってるじゃないか、くえん」

「姐さん、あの時のお礼や積もる話もありますけど、今は急いでのでまた後日にでも。さとりには説明不要だから省くけど、手伝ってもらえる？」

こんな急いでいるときにはさとりの能力は便利でありがたい。ここに住む多くの妖怪や一部の人間の中に能力を待って生まれるものが

いる。妹紅なら『老いることも死ぬこともない程度の能力』慧音なら『歴史を食べる程度の能力』そして目の前にいるさとりなら『心を読む程度の能力』だ。言って字の通り彼女は心を読むことが出来る。俺がこの場所に來た段階でどうしてここに來たのか理解しているだろう。

「吸血鬼と戦うのを手伝って欲しいのね。くえん、悪いけれどもそれはできないわ」

「さとの言うとおりだ。お前の頼みといえどもそれはできない」

「まっでしようね。事情を知ってるから期待はしてなかったですけど」

地底に住む妖怪たちは地上の存在に嫌われてしまった者たちだ。その彼らが力を貸してくれるとは思っていなかった。それも交渉の道具として、戦地に向かうなんて了解してくれないのはわかっていた。期待はしていなかったが、藁をも掴む想いでここにきたのだ、多少のショックと絶望は抱えてしまう。

「は……。悪かった。じゃあ俺は戻るよ。次にまた会えたら酒でも飲みましょう」

「待ちなさい。手伝えない代わりにひとつ教えてあげるわ」

諦めて帰ろうとしていた俺はさとり呼びとめられた。

ため息、そんな訳で俺の第一プランは失敗に終わり、こうして命がけの交渉に向かうことになったのだ。さとりから勝利への可能性を教えてもらって来ている訳だが、教えてもらった内容も、ナイフが

勝利への鍵というなんとも微妙なものだ。これは俺が唯一外の世界から持ってきたものだ。けして銀製で吸血鬼に効果的な武器って訳ではない。正直なところ、人里で手に入るナイフのほうが使い勝手がいい。無駄に重くナイフとしても使い辛く、かといって剣のようなりーチもない。無駄にごつく、普通のナイフのように投げることも不可能で、ただ振り回すしかできない代物だ。それでも俺がこのナイフを使っているのは一種の呪いかもしれない。

ため息ひとつ。迷っている暇はない。今妖怪の山は襲われている。紅魔館の主力と思われる魔女の手によって。そして人里には雑多妖怪どもが襲っている。このチャンスに逃すわけにはいかない、この紅魔館の守りが薄くなっているタイミングを。このチャンスに逃せばレミリアを交渉のテーブルに着かせることは出来ないだろう。彼女が幻想郷に対して油断している今しかない。

ナイフを握り締める。心が真っ白になっていく。迷いや恐怖心が消えていく。ただやらないといけない、俺の使命を遂行する為だけの機械に心が変わっていく。紅魔館を真っ直ぐ見据え歩きだした。

対決 拳術使い

俺は赤髪の女性を真っ直ぐ見据えている。最終目的は交渉だ。だからいきなり攻撃するつもりはない。あくまでも正々堂々。

「俺は紀伊呂 くえんという人間だ。ここの主に用が有ってきた」

女性は俺を審査するように上から下まで見る。

「すいませんがお嬢様とアポがない方を通す訳にはいきません。それにお嬢様を切りつけた侵入者を通す門番もいませんよ」

こうなるのは当たり前だろう。どう考えても俺の特徴は門番に伝わっているのが普通だ。いくら生きて逃げるためとはいえ、いきなり切ったのは軽率だった。しかしここで引いたら来た意味がない。いや、それ以前に狼藉者を逃がしてくれる程優しくないだろう。

「俺にも事情があつてね。無理にでも通ると言ったら？」

「この紅 美鈴がお相手いたします」

美鈴が構えをとる。よく知らないが中国拳法の構えだと思う。昔読んでいた漫画で見たことがある。そのせいで中国拳法イコール強いイメージがある。しかし戦闘が避けられないことはわかっていたのだ。ただやらないといけない事の為に足掻くだけだ。

「ならお手並み拝見だ。門番さん！」

一気に距離を詰めナイフを真っ直ぐ突き出す。しかしいとも簡単に

避けられ拳が鳩尾に入る。そして蹴りが俺の身体を吹き飛ばした。

「貴方何者ですか？ 殺すつもりで攻撃したのですが、なんで生きてるんです？ 特に霊力で防いだ感じもありませんし」

のそのそと立ち上がり、ナイフを正面に美鈴を見据える。

「御生憎さま、最弱の俺は強者に蹂躪されるのは慣れてるからね」

「そうですか。なら死ぬまで攻めるまでです」

そして彼女は言葉通りの猛攻を開始した。正確に額、こめかみ、顎、喉、鳩尾、肩口などの急所を拳や脚の多彩な技で攻撃してくる。防御など間に合うわけも無く、ワンサイドゲームが続く。しばらくして猛攻が終わった時、俺は血まみれになっていた。それでもまだ生きている。普通ならショック死しているだろう。しかし前にもこのように一方的に殴られた俺には抗体がある。だから普通なら死ぬほどの攻撃を放った直後を狙い、ナイフで美鈴の腹に一撃を入れてやった。

彼女は突然の攻撃に対して距離をとり2撃目が来ることに対し対処した。妖怪の彼女にしたら腹の刺し傷程度ならば致命傷にならない。しかし彼女の瞳には戸惑いの色が有った。彼女の拳法は素晴らしい。全く武芸の心得の無い俺でも格の違いがわかるほどのものだ。だからこそ彼女は誇りにしていたのだろう。だが目の前にある光景はその誇りをぶち壊す光景だ。誇りにしていた拳法で明らかに格下の相手をして、絶対に死ぬはずの攻撃を過剰に放ったのだ。なのに相手は生きており、ましてや反撃までしたのだ。傷の痛みと相乗して、目の前の俺は彼女を戸惑わせた。

「本当に貴方は何者ですか……。いえ本当に人間なのですか!？」

「人間ではないかもしれないね。殺人鬼だから鬼かもしれない。もしかしたら死神かもしれない」

自分でも左右に揺れているのを自覚しながら再度ナイフ構え直す。正直俺から攻める体力など有る訳がない。こうしてナイフを構えているのでやつとなのだ。ただ真っ直ぐ彼女を見据える。美鈴が踏み込むのを確認してナイフを振るう。彼女の妖怪という高いポテンシャルは、人間の身体では着いていけない。だが攻めるタイミングさえわかれば攻撃することが出来る。相手の攻撃にあわせてナイフを振るう。振るったナイフが彼女の肩にかする。代わりに拳をもろに食らう形になってしまった。再度攻撃を食らいながらナイフを突き出すがいとも簡単に捌かれてしまった。そして再度必殺の一撃を食らう。

肋骨が折れる感覚がする。何本かが肺に刺さり、中が血で満たされ呼吸がしづらくなってしまった。飛んでくる蹴りを何とか腕で防ぐが、腕ごとへし折られた。そこに追撃の一撃が突き刺さる。なんとか身体の軸をずらして直撃を避けるが、かすった腕が動かなくなってしまった。苦し紛れで美鈴に身体を押し付けて攻撃の勢いを殺そうとしてみる。しかし流石は達人だった。ワンインチパンチ、そんなところだろっ腹に当てられた掌で内臓がシャッフルされてしまう。大量の血を吐き出す。それでも彼女から離れまいとするが。次は間接を捕られ起こっていた腕をへし折られた。その勢いで地面に叩き付けられた。肺の空気が抜け、一瞬頭の中が真っ白になる。

「諦めなさい。このままでは苦しんで死ぬだけです。貴方は人間にしては頑張りました。その頑張り免じて最後の一撃は苦しまないようにしますから」

「お優しいことですね……。だがまだまだ。俺はあんたより強いやつと戦ったことがあるんだよ。だからまだっ」

腕を中心に地面に押さえられつけられ、立ち上がることも、身体を動かすことも出来ない。俺の命は美鈴に握られているも同然だ。それでも諦める訳にはいかない。俺は俺の理想郷を守るためにここに来たのだ。そして何よりも罪を償うために来たのだ。いくら善行を積もうと許されるはずは無いが、それでもないもしなければ変わらない。だからここに居るのだ。

ガンッ。衝撃が身を駆け巡る。無理やり俺の意識は美鈴に刈り取られた。

狂気

俺は夢を見ている、あの時の夢を。走馬灯だろうか、それとも死んだ俺の魂が裁かれる為の下準備なのだろうか。俺はあの時の夢を見た。

大学は半年もかからずに辞めてしまった。俺には結局学校は合わなかったのだ。あのやりたくも無いことを無理やり詰め込まれる場所は。大学を辞めた俺はフリーターになった、時給830円、地方都市のチェーンのレストランで。店長やエリアマネージャーには正社員になることを進められたが、フリーターというスタイルを貫いた。そんな俺を家族は避けている。当たり前だろう、高い金を払って育てた子供はフリーターで社員になるつもりはない、俺の考えている事がわからないのだろう。でも、妹だけは俺のことをさげなつかしかった。昔のまま、仲のいい兄妹でいてくれた。年が離れていたのが良かったのかもしれない、それに馬鹿だったから良かったのかもしれない。どんな理由でも家に居場所が無かった俺の救いになったのは変わない。

「おいっれもん、また俺の漫画勝手に持って行ったる」

妹の部屋にノックも無く入る。いつも妹のれもんは俺の漫画を勝手に持って行く。それだけなら良いが、けして本棚に返すことはないのだ。仕事が続いたときなど本棚の半分がれもんの部屋にある事なんてざらだ。

「くえんいいじゃないの。どうせ同じ家にはあるんだから」

俺はため息を吐き呆れる。

「たしかにそうだけどよ、元合った場所に返すのは常識だろ」

「もう、常識なんかに関われて、そんなのじゃ人生楽しくないよ」

適当に流しながら、呆れて俺はベットに座る。

「はあ、お前はホントいい根性してるよ、兄を呼び捨てするし、常識に囚われないし」

「えへへ、すごいでしょ」

褒めてない、そう突っ込みながら再度ため息を吐く。

「そんなことはいいや」

「え？ 漫画返さなくていいの？」

「漫画はちゃんと返せ。そうじゃなくて、お前誕生日近いだろ。欲しい物ないのか？ なんか買ってやるから欲しい物をひとつ言え」

そう今日は誕生日が近いれものの欲しい物を聞くために来たのだ。

「プレゼント？ 特には無いんだけどな。何でもいいよ、そういうのは気持ち嬉しいし」

彼女は可愛く笑った。その頭を撫でてやるとさらに嬉しそうに笑った。

数日がたち、れものの誕生日当日になった。今日はバイトも休みを

とり、彼女を連れて買い物に行くつもりだ。結局プレゼントは買っていない。何でもいい、その一番難しい答えに困った俺は当日買い物に付き合うことにしたのだ。プレゼントはその時に欲しがっていたものを買ってやればいいだろう。

階段をゆっくりと下りていく、居間の扉を開く、しかしそこは見慣れた居間ではなかった。有るのは赤、赤、赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤あかあかあかあかあかあかあかあかあかあか。俺は吐き気が我慢できずに、しゃがみ込み吐き続けた。しばらくして出せるものは無くなつたが、まだ吐き続ける。空っぽの胃からは出てきたものは胃液だった。いったい何が起きているのか理解が追いつかない。目の前には元は両親だった物がばらばらに散らばっている。

妹の声だ。しかしその声はあまりにもいつも通りだった。よく飲みすぎて吐く俺をからかうその声色だった。下に向けていた顔を上げるとそこにはれもんが、赤く化粧したれもんが立っていた。そして右手には銀色に輝く、まだ幼い彼女には似合わない、むだにこついな이프が握られていた。

本当は聞きたくなかった。聞いてしまったらもう戻れないと心が危

険信号をあげている。なのに俺の口は聞いてしまった。

「んーとね」

答えるな、答えるな、必死に心の中で念じ続ける。しかし彼女は答えてしまった。それは俺が予想していたもので、一番外れて欲しい予想だった。

「私ね、お父さんもお母さんも殺したの。バラバラにしたんだよ！
楽しかったな。ねえくえん、やっぱり常識に囚われたら人生楽しめないんだよ」

可愛い笑顔だった、それは覚えている。次に俺が気が付いた時、俺は彼女に馬乗りになり、無駄にこついナイフでれもんを殺していた。俺は恐怖したのだ、れもんに。彼女が次は俺を殺すかもしれない、だから殺される前に彼女を殺してしまった。なんで彼女に殺されなかったのだろうか。そのそうが良かったのだ。俺の弱さが憎い。声も出せずに俺は泣いていた。

しばらくの間俺は血まみれの居間で泣いていた。今日はれもんの誕生日で一緒に買い物に行つて、プレゼントを買つてやる。そんな平和な一日の予定だったのに、どうしてこうなったのだろうか。れもんにプレゼントをあげないと、せつかくの誕生日なのだから。

俺は立ち上がり、れもんに刺したままのナイフを抜いた。れもんに誕生日プレゼントをあげよう。気が狂ったフリーターの男が家族を殺した、そうだお袋も親父もれもんも俺が殺した。れもんに罪を着せない、それが俺の出来るプレゼントだ。その台本を確かにする為に俺は家を出た、外はまだ梅雨まえの冷たい雨だった。

絶望の果て

街は悲鳴で溢れていた。それもそうだろう、真っ黒なサマーコートを着た男がナイフを振るい次々と人を殺しているのだから。ああ、まるで死神だな、俺はまだ幼い少女を切りつけながらそんなことを思っていた。まるで俺の心には色がない、だから感情もなく、他人事のように見えるにだろう。

刺された少女は倒れこみ一緒にいた少年に受け止められた。それを見ていた周りの大人が俺に襲い掛かってくるが、次々と喉を切り、殺していく。ただ素振りでもしているかのように、何も感じない。

ふらふらと歩きそこにいる人を殺して歩いた。中には妹や彼女を殺され、恐怖に逃げた者もいた、そんな行動が俺を救ってくれる。あの時れもんを殺してしまった俺の行動を許してくれた。だから俺は殺し続けた、れもんの罪を被る為に、俺自身を正当化するために。

いったい何人の人を殺したのだろうか、覚えていない。俺は警察に追われた。そしてなんとか昔潰れた病院に逃げ込むことが出来た。俺の手は真っ赤に染まっていたが、ナイフは赤には染まっていなかった。まだ足りないのかもしれない。このナイフが赤に染まるまで続けないといけないのかもしれない。

その時1人の女性が現れた。彼女は豊満な体を真っ赤なライダースーツに身くるんでいた。俺はれもんの為に、彼女を殺す為の走り出した。そして浴びたのは返り血ではなく、強烈な蹴りだった。

「よお死神、悪さが過ぎたな。お姉さんが成敗してやんよ」

俺は無言でナイフを振るった。しかしその軌道は女を傷つけることはなかった。そして彼女はまるで遊んでいるかのように、オラオラと叫びながら拳を叩き込んでくる。ワンサイドゲームでさえない、ただサンドバック相手にシャドーボクシングしている感じだ。体中の骨が折れていく。いたるところがナイフで切られたかのように裂けていく。これで生きているのが不思議でならないが、女が死なないように手加減しているのだろう。最強、その言葉が頭に浮かんだ。俺ではこの女に勝つことはできない、殺すことが出来ない。俺はここが3階ということも忘れて窓から飛び降りた。

俺は走っていた。窓から飛び降りたせいで足の骨にひびが入っていたが、とにかく走って逃げていた。純粋な恐怖から逃げ続けた。女が俺に与えた死への恐怖が罪への恐怖をつれて来た。妹を殺した罪、多くの無関係の人を殺した罪、それが俺を追いかけてくる。いくら走っても、走っても逃げることは出来ない。

こける、立ち上がってまた走る。血を吐く、呼吸が出来ない。酸素が足りない。それでも走る。ついに俺の足は動かなくなってしまった。

「すげな、死神の兄ちゃん。普通なら走ることさえ出来ない傷なのにな」

女が背後から迫ってきた。俺は這いながら、みつともなく今も逃げようと続けていた。

「逃げるな、逃げるな。別に殺しはしないよ。罪を償ってもらうだけだ。その結果死んでしまいかもしれないけどな」

彼女の蹴りがわき腹に飛び込み、もだえ苦しむ。血を大量に吐き小

さな水溜りを作った。許しを請おうにも喋ることさえ出来ない。だから俺はみつともなく、いまだに逃げようと足掻いている。

「お前がどうしてあんな奇行に走ったかは私は知らないが、人を殺したんだ。その罪は償わないとな」

彼女のブーツが俺の右をナイフごと踏み潰した。痛みで悲鳴を上げる。もう逃げるといふ行為さえ叶わない。小さく俺の口は殺さないでくれと呟きはじめた。

「死にたくないよな。でもそんな人間をお前は殺したんだ。そんなお前が殺さないでくれと懇願できる立場ではないだろ」

殺さないでくれ。

「そうだな、お前は地獄に落ちろ」

俺の意思は女の蹴りで刈り取られてしまった。

目を覚ますと俺は真つ赤な広間に転がっていた。身体の怪我には荒く包帯が巻かれている。死なない程度の手当てだ。真つ赤な部屋ということはここは紅魔館の中なのだろう。てつきり殺されたものだと思っていた。思えば、あの時も殺されたと思った俺は幻想郷に迷い込んでいた。あの時から悪運だけはいいいみだいた。

「やっとお目覚めかしら、殺人鬼さん」

聞き覚えがある声に顔を向けると、レミリア・スカーレットが大きな玉座に身を埋めていた。

「ふふふ、美鈴が貴方を殺しかけた時は焦ったわ。貴方とはもう一度話がしたかったもの」

どうやら彼女の気まぐれで俺は生かされているらしい。これは有り難いことなのかもしれない。どんな状況にしろ目的であるレミリアの前に行くことが出来たのだから。

「そりゃあ寛大なお心で。俺を生かすついでに今やってる侵略もやめてくれたら嬉しいんだけど」

「ずいぶん肝が据わっているのね。その怪我で私にそんな軽口を叩けるなんて」

「じゃないとこんな所に1人で来ないさ」

とてもじゃないが逃げる事は出来ないだろう。この怪我だ、前のように逃げ切るなんてことはまず出来ない。そして助けも来ない、慧音の妹紅もチルノの今は別の場所で戦っているだろう。つまり自分の力だけでこの場を切り抜けなければならない。あの女に一方的にやられた時に近い絶望感がある。それでもどうにかしないいけない、生きる為に。

逆転劇

俺はレミリアと向き合い様子を探っている。しばらくの間無言が続いた。レミリアは俺を吟味するかのように目を走らせている。吟味が終わったのか彼女が無言を壊した。

「やっぱり貴方はただの人間ね。能力もなければ、霊力も普通以下の雑魚ね。でもその貴方が今も生きている。美鈴は種族としては正直弱い妖怪だわ、でも武術のお陰でそこらの妖怪にも負けない猛者なの。その彼女が殺す気で戦ったのに貴方は生きている、これは運がいいなんて問題じゃない、いったいどんなトリックを使ったの？」

「さあね、俺にもさっぱりだよ。運が良かったとしかいえないよ」

「運ね……。このナイフに何かあると思ったのだけど、何にも無かったわ。いらなから返すわ」

彼女は俺のナイフを投げて地面に突き刺した。普通なら投げるなんて出来ない代物だが、流石は吸血鬼だ。種族としての違いを見せつけられる。

「いいのか、ナイフを返しても。敵に武器を返すなんて」

「別に構わないわ。それに貴方がそれを持ってなかったら面白くないもの。私は貴方を気につけているの。人を、命を殺すことに一切の躊躇いを持たない貴方のことを。だから特別にチャンスあげるわ。貴方が私に勝つことが出来たら交渉とやらのテーブルについてあげる、私の僕になるなら命は助けてあげる。悪い話ではないと思うわ」

どう足掻いても俺の力ではレミリアに勝つことは出来ない、それでも俺は戦いに來たのだ。生きるために、罪を償うために。あの女は俺を地獄に落とすつもりだった。本当に地獄だ、目の前の敵は鬼で悪魔だ。まさか旧地獄の次は地獄の住人と死闘なんてことになるなんて。

ナイフを引き抜き正面に構える。心の色が無くなっていく。恐怖も絶望も色をなくしていく。

「これが答えだ、西洋の鬼」

「残念だわ、ここで貴方を殺す運命になるなんて。最期に貴方の名前を教えて」

「紀伊呂 くえん。殺人鬼、鬼に堕ちた男だ」

「そう、くえん。今日は月が紅くて機嫌がいいの、だから本気で遊んであげる」

轟音、彼女は轟音を上げて移動した。幻想郷には天狗という最速の種族がいる。そのスピードには負けるだろうが、人間の俺には変わりはない。どちらにしても目では追えないのだから。動かないよりもまし程度で身体動かす。羽が左腕に引っかかる感覚と同時に腕が吹き飛んだ。身体に巻いてあった包帯を腕に巻きつけ止血するが、こんな事でどうこうなる傷ではない。

「人間って不便ね。片腕が無くなったただけでも致命傷なんだから」

天井近くにレミリアが飛んでいる。その周りには赤い魔方阵が浮かび俺を狙っている。

「さあ、もうピンチよ！！　どうする、くえん」

赤い蝙蝠たちが魔方阵から飛び出し俺に向かう、残った右腕でナイフを振るい蝙蝠を切りながら射線から逃げる。ナイフは壊れることは無かったが切りつけた衝撃だけで腕が痺れ感覚がなくなる。

「まだよ！！」

全方向に高エネルギーの紅い魔力をばら撒き始めた。この次元になると人間が知恵や運でどうにかできるものではない。ただ死ぬのを待つしかない。俺は真っ赤な濁流に飲み込まれた。そして周りの色が消えた。しかし俺は消えることは無かった。本当なら蒸発してもおかしくないエネルギーの中に俺はいる。そして俺の周りだけ色がない灰色の世界に変わっている。理解が出来ないが、これはチャンスだ。俺は走る、そして魔力を踏み台にしてレミリアに切りかかる。やっと届いた一撃。

彼女は舌打ちをし俺と距離をとる。俺は地面に着地し正面から見据える、彼女が飛んでる限り俺からは攻撃は出来ない。

「いつたいなにをした。ただの人間が出来る芸当じゃないわ」

「さあね。そんなに気になるなら試してみな」

安い挑発だ、だが効果はあった。彼女は一直線に俺に向かってくる。それを正面からナイフで受け止め蹴りを入れる。おかしいことが起きた。ただの人間の蹴りがダメージになったのだ。いや吸血鬼の一撃を片手で受けれる時点でおかしい。普通ならミンチになるはずだ。だが俺はなんと無い、むしろ怪我しているのが嘘のようだ。

「人間ごときが舐めるな!!」

彼女の掌を中心に魔方陣が浮かぶ。

「スピア・ザ・グングニル!!」

深紅の槍が現れる。流石に俺でも知っている。北欧神話に登場する必殺必中の槍だ。その槍を手に彼女は攻める、それに対して俺はナイフで捌き続ける。吸血鬼の力、速さと対等に。永遠に続くと思える攻めぎ合いを崩したのはレミリアだった。彼女自身を中心に魔力が爆発し、吹き飛ばされてしまったのだ。

「はあはあ」

思ったよりも体力を消耗してしまっている。それもそうだろう2人の力が拮抗したのだから。

「そのナイフね。そのナイフが貴方と私の種族の壁を壊している」

そして思い出す。さとりがナイフが鍵と言っていた。だが勝利と言うにはまだ足りない。決定打が無いことには変わりが無い。心を落ち着けナイフに意識を向けていく、そして何かが重なる音がした。

『色に染まらない程度の能力』それがナイフの正体。このナイフが能力そのもの、能力の塊なのだ。例えば俺は運がいでは片付けられない経験ばかりしている。色に染まらない、その本質は何者にも影響されないことだろう、だからこそ俺は生き残った。いつも死に掛けた時はナイフを持っていた。無意識に能力を引き出していたのだろう。わかれば簡単だ、意識して能力を引き出してやればいいだけだ。

「たつく……。最弱でいるつもりが、こんな事になるとはな。紅い月の時間はお終いだ、レミリア・スカーレット」

世界の色が消えた。

終劇

- 幕間 -

世界が色を無くした。真つ赤だった広間は灰色に染まり、生気も気配も何も無世界へと変わり果てた。私の目の前にいる男、紀伊呂くえん。彼が原因で世界が変わり果てたのだろうが、彼からは何も感じない。そこに居るのかさえ分からない。私、レミリア・スカーレットには能力がある。『運命を操る程度の能力』私自身もどのような能力なのか分かっていない。私には運命が見え、稀だが運命自体を捻じ曲げることができる。その私をもつてしても彼の運命を覗くことが出来ない。まるでそこに居ないかのような感覚だ。いや、なにもものにも影響されない、それが本質なのだろう。何にも影響されない、恐ろしい存在だ。私は本物の化物を目覚めさせてしまったかもしれない。しかし私は勝たないといけない。勝って幻想郷を支配して平和な暮らしを手に入れる為に。妹が、フランが生きてくれる世界を作るためにも。

『スカーレットマイスタ』

魔力の濁流で彼を襲う為に魔法を練るが、技が発動されない。この空間自体が魔法の発動を拒否、いやこの空間が魔力の影響を受けない為に発動しないのだろう。つまり私はもう魔法を使うことが出来ない。吸血鬼としての力と握り締めているグングニルだけで目の前の男と戦うことになる。

- 開劇 -

世界の色が消えた。灰色の世界でレミリアと向かい合う。ここからは何にも影響されない戦いだ。純粋な魂と魂のぶつかり合い、そこには種族の壁も影響しない。

先に動いたのはレミリアだった。槍を使つての突撃。彼女は一撃で戦いを終わらせるつもりなのだろう。それに答えるべきだ。タイミングを合わせてナイフを突き出す。槍とナイフの切っ先がぶつかり合い凄まじい衝撃が生まれた。最強の槍と、何にも影響されないナイフは衝撃に耐えることができる。しかし使い手の俺やレミリアはこの衝撃に耐えることが出来ない。衝撃で皮膚が裂け、腕や足の筋肉が破裂する。だがここは何も影響がない色を無くした世界、怪我など影響することはない。唯一影響するとすれば心だけ。俺は能力を行使し続け、レミリアは能力に吞まれないように抵抗する。心の強さで全てが決まる。心が先に折れた方が負ける。

彼女は何の為に戦っているのだろうか。いったい何の為に幻想郷の侵略など思い立ったのだろうか。どのような理由が有るのかは俺には分からない。もしかしたら大義名文があつて行っているのかも知れない。だが負ける訳にはいかない。俺にも負けられない理由がある。妹紅に聞かれた、なぜチルノに執着してるのか、なぜチルノを友達と呼ぶのか、全ては妹だ。俺はまだ幼く少し馬鹿なチルノに妹を重ねているのだろう。俺は妹の為に鬼にまで堕ちた。そして俺は妹を助けるどころか殺してしまった。だからこそ今度こそは、守らないといけない。それになんだかんだで氣にしているのだ幻想郷を。この優しくも残酷な世界のことだ。だからこの地で俺は罪を償う為に生きる。最弱をもつとに生きる俺の唯一譲れないものの為に。身体が力が最弱であろうとも、あの時何も出来なかった最弱であろうとも、今だけは守る為に、償いの為に、心だけでも最強で有る為に、俺は折れない。

爆音、そして世界が色を取り戻した。俺は生きている。押し負けたのはレミリアの方だった。身体もぼろぼろになりグングニルも折れ倒れていた。吸血鬼と殺人鬼の戦いは殺人鬼の勝ちに終わったのだ。

「俺の勝ちだな。約束どおりに交渉のテーブルに着いてもらう」

「あら、優しいのね。今なら私を殺せるわよ、そうすれば簡単に終わるわ」

レミリアは目を合わせることなく、倒れたまま答えた。たしかにこのまま彼女を殺せば全ては解決するだろう。裏切った妖怪も彼女が失脚したことで勢いをなくし纏まりもなくなる。そうなれば後はどうともなる。交渉よりも簡単のことだろう。だが。

「殺さないよ。幼い女の子なんて殺すつもりはないよ」

「あらロリコンなの、貴方は」

何とでも言えればいい。なんとなくだ、なんとなく殺す気にはなれなかったのだ。あの時妹を殺した俺には戻りたくなかったから。

「ひとついいか、何で侵略を始めた。そんな事をしなくても幻想郷はお前たちを受け入れたのに」

「普段なら言いたくなつて蹴るけど、私に勝った御褒美に教えてあげる。私には妹がいるの、あまりにも強すぎる能力を持った妹が。そのせいで彼女は、フランは狂気に触れてしまった。外ではもう暮らせない、強すぎるあの子は世界のバランスを壊してしまうわ。そしていつかあの子は滅ぼされる。だからここに逃げ込んだの。でもね、この世界の妖怪は弱体化しすぎている。こんな世界だったらあの子が簡単に壊してしまう。だから私は妖怪が強い存在としていられる世界を望んだの。あの子が幸せに、普通に暮らせる世界を作るために」

レミリアは俺と似ているのかもしれない。そとでは妹になにも出来なくて、だからここに逃げ込んできた。そして妹の為に戦っていた。

「約束は守るわ。紅魔館は即刻戦闘行為を止め、交渉に着く」

その言葉と共に2匹の紅い蝙蝠が彼女の傍から、屋敷の外へ飛び立った。1匹は山へ、もう1匹は里へ向かったのだろう。

「負けたはずなのに気持ちが悪くなったわ。これで良かったのかもれないわ。ごめんなさい、交渉はしばらく後にはじめるわ。少し眠りたいの、今ならゆっくり眠れそう」

彼女は眠った。その姿は夜の王、恐ろしき吸血鬼には見えなかった。ただ妹を純粹に心配する少女だった。

これでこの異変は解決へと向かって行くだろう。そして俺の役目も終わった。後の事は偉い人に任せればいいだろう。いや、まだ少しだけ残っている。

「顔を出したらどうです、賢者様」

俺は何も無い空間を見つめ言葉を放った。その言葉に反応してか、空間が裂け1人の金髪の女性が現れた。

「あらよく気が付いたわね、紀伊呂 くえん」

彼女は妖怪賢者 八雲 紫。こうして顔を合わせるののは初めてだが一発でわかる。たしかに藍や慧音が言つとおり食えないやつだと。

「あの色の無い世界に干渉し続ける力がありましたから。それにあなたなら見えていると思ってました」

この異変の中、彼女だけ動いていなかった。おそらく試していたのだろう、本当にどうにもならないようなるまで試すつもりだったのだろう。この人間が、妖怪がこの危機を解決できるかどうかを、そして今後も起きるかもしれない異変に対抗できるかを。

「ふふふ、流石ね。お酒選びと商売しかできないと思っていたけど、なかなかやるわね。後のことは任せなさい。」

「ひとつお願いしていいですか」

「言ってみなさい。今回の異変解決の立役者なのだから、お願いぐらい叶えてあげるわ」

最後の仕事だ。

「紅魔館の住人を幻想郷に受け入れて欲しい」

俺は彼女のことを憎めなかった。俺と似た者なら彼女には幸せになつて欲しかったのだ。

「もちろんそのつもりよ、幻想郷は全てを受け入れる。それなりのペナルティーは負ってもらうけどもね」

それを聞いて安心した。あとのことは任せればいいだろう。俺は人里に帰って、慧音に無茶をした説教を受ける。それを見て妹紅が笑うだろう。その後傷の手当だ。ナイフのお陰で命にも行動にも影響

が無いようにしているが、左腕が無くなって、体中の骨が折れているなどから早く手当てをしないと。そして最後はチルノを褒めてやらないと、よくがんばったと。

「くえん、貴方はこれで英雄ね。ただの人間がたった1人で吸血鬼を倒したなんて」

俺はため息をついた。この妖怪はなにを言っているのだろうか。

「解決したのは鬼ですよ。幻想郷最強の妖怪、鬼が解決したんですよ。俺は雑貨屋『宇宙檸檬』店主 紀伊呂 くえんっていう最弱です」

コーヒー片手に

「コーヒーはいいね。幻想郷ではなかなか飲めないんだよな」

レミリア・スカーレットが引き起こした異変、吸血鬼異変から1週間がたった。俺の予想通り慧音に説教をくらった、妹紅には笑われた。俺が怪我と能力の酷使で倒れたことで中途半端なところで終わってしまったが。怪我は妹紅が何処からか持ってきた薬のお陰で数日で回復に至った。流石に無くなった左腕はそのままだが。だが妹紅には感謝しないといけないだろう、おそらく彼女は仇に頭を下げて薬を貰ってきたのだ。酒を奢っても罰は当たらないと思う。

異変の首謀者のレミリアは博麗の巫女による契約によって縛られることになった。人里で人を襲ってはいけない、食料の人間は支給さえるという軽いものになったのはあの賢者が動いた結果だろう。

そして異変の解決者は幻想郷最強の妖怪ということになっている。俺が怪我したのは異変中に戦闘に巻き込まれたことになっている。誰も想像しないだろう、簡単なお札も使えない、最弱を自称する俺が動いたなんて。事の真相を知っているのは一部の人間と妖怪だけだ。

「さとりには助けられたよ。お陰でナイフの秘密に気が付けたし」

今、俺は地霊殿に訪れ、さとりとお茶をしている。

「にしても、さとりには助けられてばかりだな。幻想郷に流れ着いた時も怪我の手当てをしてもらったし」

「いいのよ、別に。嫌われ者の妖怪達や鬼も恐れずに接してくれる人間は貴重だもの。それに幻想郷に流れ着いた時もただの気まぐれで助けたのなのだから」

俺はライダースーツの女に襲われ気を失い、次に目覚めた時地霊殿の一室に眠っていた。俺は旧だが本当に地獄に落ちたのだ。だが運が本当によかった。さとりのお陰で怪我也だが心も助けられた。初めの頃は情緒不安定だったが、怪我が治る頃には普通の精神状態に戻る事が出来たのだ。全てはさとりの能力のお陰だ。

「そういえば、どんな気まぐれで俺を助けたんだ？」

「ペットにしようと思ったのよ。外の人間なんて珍しいじゃない？」

さとりのペット、見た目幼い少女のペット。それはなんと危ない響きで、感じてはいけない興奮を覚えてしまう。それはそれで楽しいかもしれないなど考えていたら、テーブル越しに思いつきり足を踏まれ、すぐく睨まれてしまった。心が読まれるのも考え物だ。言葉の意図をちゃんと汲んでくれるからから会話が楽だが、おちおち妄想もできやしない。

「はあ、あなた自分はロリコンではないとかいってるけど、説得力無いわね」

「ひどいな。つかさとり、お前のほうが10倍以上年上だからロリコンではないだろ」

「自分で言うのもなんですけど、私に好意を持つ人はロリコンよ。例えばペットに対して興奮を覚えるなんてMね。ロリコンの上にMなんて救いようがないわね、くえん」

たしかに救いようがない人間だ。ロリコンでMなど外の世界では犯罪者予備軍と言われるレベルだ。しかし俺はロリコンでもMでもない。たしかに外では犯罪者だが。これは全てさとりが悪いのだ、さとりが俺をペットにするなど言うのがいけないのだ、など考えていたらまた足を踏まれてしまった。本当に考え物だ、心が読まれるのも。

「そう言えば、勇儀さんにくえんが吸血鬼を倒した話をしたら、あなたと手合わせしたがっていたわよ？」

「勘弁です。流石に死んでしまいます」

あの人と手合わせなどしたら死んでしまう。ましてや『怪力乱神を持つ程度の能力』などという意味の分からない能力を持つ上に、喧嘩のときは酒を溢さずに戦うという化物だ。左腕の次は右腕が犠牲になってしまうだろう。

「そういえば大丈夫なの、左腕がなくても」

おそらく俺の心を読んで聞いてきたのだろう。

「まあ不便といえは不便だけどね。仕事もできるし大丈夫かな」

「勇儀さんに頼んだら義手が作れる河童を紹介してもらえと思うけど？」

「いいよ、そんなことしたら山が大変なことになる。それにこれは、ね。心読めるなら分かるだろう？」

「枷、ね。妹を殺した、多くの人命を奪った自分を忘れない枷ね」

これは枷だ。俺が罪を償い続けるための枷なのだ。だから義手だろうと左手はいらない。

「なあ、なんでもんはあの時狂ったんだろうな」

本当になんとも聞いてみた。もしかしたら彼女なら、このナイフについて知っていた彼女なら何か知っているだろうと。

「そのナイフのせいでしょうね。まだ私が外にいた時に見たことあるよ、それを。『色に染まらない程度の能力』その本質は何事にも影響しない事にあるわ。それを使えば本来の自分の色を取り戻すこともできる。つまりね、その人の本質である能力を手に入れることが出来るの。多分れもんちゃんは強すぎる能力のせいで狂気に触れてしまった」

つまり、あの日俺に関わった人の中には能力に目覚めてしまった者がいてもおかしくはない。そしてそいつが幻想郷に流れ着いてもならおかしくはないのだ。俺は罪を償う。だが俺が傷つけた人を前に何をするのだろうか。仮にそれがれもんのように狂気に触れていたら、俺はどうするのだろうか。

コーヒー片手に（後書き）

さとりは俺の嫁！！！！

文句あるやつは俺を倒してからにしろ！！！！

どうも汰我です。

切りがいい感じに成ったので後書きをちまちまと。

吸血鬼異変無事完結です。いやはや……、どうにかなりました。ほぼ見切り発進で始めたこの話、何とか続きそうな予感です。

ついでなので紀伊呂 くえんの誕生秘話（？）をここで語ろうかと。

彼は数年前に書いていたオリジナル小説の主人公でした。書いてたといってもプロットが存在してただけに等しい小説でしたが……。今回その彼を二次をオリ主という形で復活させてみました。もともとの名前は『セレン』でした。あの原子のセレンです。その色からとって『灰色の死神』、原子のセレンの由来の『セレーヌ』から『灰色の月』。そんなイメージのキャラでした。

くえんが起した通り魔事件、彼の前に現れた女等々、もともと有ったものを流用しています。お陰で彼の背景はイメージ強いやすかつたです。困った点といえば、名前です。もともと『セレン』って名前は有りましたが、ストーリーで出会った女の子に名づけられたものだったので、彼本名と呼べるものがないのです。なので今回新たにつけたのが『紀伊呂 くえん』です。紀伊呂はまんま黄色、くえんは檸檬の古い呼び名で、黄色い檸檬からきています。ちなみに檸檬は好きなイラストレータのサイトの名前からとったプラス檸檬のレモンの花言葉の『愛』『情熱』。英語圏でのイメージ『無価値』

『不完全』からです。

おそらくですがこの話は、今後も昔のプロットを参考に書かれています。なのでオリジナル要素濃い目ですが、それでもいい方は今後ともお付き合いお願いします。

日常を壊す淑女

日常、いつものように店の椅子に座りタバコを吸う。変わらない日常の中にも化はあった。世話になってる霧雨の店の娘さんが魔法使いになると言って飛び出したり、博麗の巫女が本格的に巫女としての仕事を始めた。あとは多くの妖精が紅魔館にメイドとして雇われたり、チルノがよく人里に出入りするようになった。少しずつだが幻想郷は変化している。そんな中、俺は変化を無くしてしまったのも変化のひとつなのかもしれない。俺は年をとらなくなってしまったのだ。原因は分かっている、ナイフのせいだろう。ナイフの所有者である俺は色をなくしてしまった。人間としての当たり前の変化という色が無くなったのだ。このままでは人間として当たり前のように生き死ぬことが出来ないだろう。だがそれはそれでいいのだと諦めている。これもひとつの罪だと納得している。

こうして幻想郷は変化し続けているのだ、変化といえばもうひとつある。常連の客が増えたのだ。

「よお、咲夜ちゃん。頼まれてた酒入荷したよ」

彼女が来たことに気が付き、俺は入荷したばかりのブランドー片手に立ち上がった。銀髪でメイド服など着ている少女、十六夜 咲夜だ。彼女はコスプレでメイド服を着ている訳ではない。れっきとしたメイドなのだ。しかもただのメイドではない、あの鬼の住まう紅魔館のメイドである。

「本当に入荷したのね。無理だと思ってたわ」

「まあ俺にはコネがあるからね。どうだい、ここでの生活は慣れた

かい」

彼女は外の世界から人間だ。俺としては親近感が湧く存在でもある。と言っても彼女は才能が有る側の人間であり、俺のような最弱と比べるのは失礼だろう。

『時を操る程度の能力』それが彼女の持つ能力だ。時間を止めるのも、コマ送り、早送りをお手の物である。俗にいうチート能力だ。時間を止めるなら、あの青い狸型ロボットの秘密道具でもあるポピュラーの能力だが、大長編映画でいくらピンチになっても使うことの道具の一つだ。個人的には『もしも何とか』と並ぶチート道具だと考えている。これさえあれば大抵の問題は解決できるのだから時間を止める、世界を思い通りに書き換えることが出来たら、ストリーが破綻するから出番がないのは仕方ないのかもしれないが。『何とかボックス』に関しては、別の世界を作るので微妙に世界を作り変えるのとは違うのだけれども。

「それなりには。お嬢様が暇をして無理難題を言うのには困ってるけれどもね」

「ははは、あの吸血娘は歳相応に大人しくすればいいのに、500年は生きてるんだろ」

「しかたないわよ、妖怪にとっては暇が一番の敵なのだから」

色を無くし、変化をなくした俺はどうなのだろうか。永遠と終わることのない罪滅ぼしは繰り返す俺の敵は何なのだろう。暇はしない、死さえ罪滅ぼしと考えれば死さえ敵ではない。そんな俺の最大の敵はいい。

「くえんさん、私はまだ買出しがあるのでこれで。そうそう、お嬢様が会いたがっていたわよ」

「はいはい、気が向いたら行くって伝えといて」

あくまでも社交辞令としての返答。出来れば会いたくないってのが俺の本音だ。これは吸血娘の自業自得だ。前に会った時に俺の血を吸おうとしてきたので、紅魔館中を逃げ回り、俺は紅魔館の地下に迷い込んでしまった。そのせいで悪魔の妹におもちゃにされかけてしまうという、なんとも稀有な経験をした。生きていられたのは奇跡に近い。もしパチュリーに見つかるのが遅かったら死んでいただろう。俺を助けるために彼女の使い魔が変わりに犠牲になり全治1カ月の怪我をおってしまったが。始まりは吸血娘がB型の血が吸いたいなどふざけた理由だ。もう会いたくないと思っても仕方ないだろう。

「ふふ、ロリコンの貴方が幼女に会いたくないなんて嘘ばかり」

突然背後か話しかけられた。相手はわかっている。この胡散臭い感じの知り合いなどそうそういない。いや彼女以外にいてもらっては困る。

「人の心を勝手に読まないでください。そういうのはあなた以外に担当者がいますから」

「貴方がお熱な地下の子ね」

「そーですよ。で、賢者様が俺に何かようですか？ 暇してるんですか？」

妖怪賢者、八雲 紫だ。実際に会うまでは店の件でお世話になっていた人だから、会ってお礼を、失礼が無いようになど考えていたが、会って俺の考えは変わった。この妖怪相手に下手に出るべきではない。虚勢でも強気な態度で接しなければ、面倒事に巻き込まれると俺の最弱の感が言っている。

「そうね、暇はしているわ。どう私の暇つぶしの為に橙に手を出さない。貴方好みのロリっ子よ。どうかしら？」

「で、手を出した俺が藍さんにボコボコにされるのを酒の肴にするわけですね。残念ながら俺はロリコンではないんで手は出さないです。よってあなた願いは叶わないです」

そう、と呟き紫は本当に残念そうな顔をしている。この妖怪が本当に幻想郷の起源に関わっているのだろうか、ただ人が苦しむのが見たいだけの捻くれ者だ。

「つか、本当になんの用なんですか、まさか俺をからかう為だけに来た訳ないですよ、賢者様ともあろう方が」

「もちろん大事な用事があるわ。と、言うわけで1名様ご案内」

突然の浮遊感、そして俺は重力に引っ張られて落ちて行った。

どうも俺の感は外れたらしい。八雲 紫は強気に出ようと弱気に出ようと、強制的に面倒事に巻き込まむらしい。

「つか……、店ぐらい閉めさせろ！！ 泥棒入ったら責任とって貰うからな！！」

俺の叫びは虚しく虚空に吞まれ消えていった。

償い

只今絶賛迷子中。いや迷子ではない。二十代後半の男を子と呼ぶのは間違っている。子が適応されるのは十代までだ。只今絶賛遭難中、言い換えた途端に深刻な問題になってしまった。悲しいかな、大人になっての失敗はいつだって深刻な問題なのだ。これもそれも紫のせいだ。こうしてあても無く魔女が住むと言われている『魔法の森』でさ迷っているのは。事の始まりは先日、紫のスキマに落とされ幻想郷のどこかにあるという八雲邸を訪れた事が始まりだ。いや、それは責任転嫁でしかない。全ては昔やってしまった失敗が始まりだった。

「ようこそ、八雲邸へ」

俺は上下逆さまの状態で見覚えのない畳を眺めながら紫の声を聞いた。

「これはご丁寧に、どうせなら案内も丁寧にしていただきましたかった」

俺は紫によって無理やりここへ連れてこられた。『境界を操る程度の能力』によって。境界、境目、物事の区分、そんな所だろうか。それを操るといふことは恐ろしい事だ。空間、距離の境目を操れば今のように移動できる。一般的に言われる結界も空間の隔離だ。つまり結界も操れるだろう。考えれば考えるほど何でも操れる能力に思えてしまう。咲夜的能力と同じチート能力だ。

「で、仕事中のただの人間を攫ってどうするつもりですか」

俺は身体を起こし胡坐を組み、紫を見詰める。

「ただのお願いよ。いえ、貴方の後押しかしら」

「お願い、後押し？ ただの人間相手に賢者様がですか」

目の前に居るのはチート能力を持った妖怪だ。それが里で雑貨屋で店主をやっている人間相手をお願いする事なんてまず無い。ましてや後押しなどするわけが無い、俺に恩を売っても特など無いのだから。

「ただの人間ね、吸血鬼を倒した鬼が人間ね」

鬼、確かに俺は鬼だ。殺人鬼という堕ちてしまった人間だ。

「なに簡単な事よ。これから異変を解決してもらっただけ」

「異変解決は巫女の仕事です。それに今は霧雨の娘さんも異変解決やってるじゃないですか。俺には大役過ぎます」

俺が吸血鬼異変を解決したのは代役に過ぎない。今は異変解決の役者が揃っているのだ、俺が行く必要は無い。仮に彼女たちでは手が余る程の猛者が相手なら妖怪が解決すればいいだけだ。

「なら彼女達に任せようかしら、人殺しを」

紫が言った言葉は異変解決に無関係の単語だった。異変は妖怪がその力を誇示するために行われるのが一般的だ。稀に自然現象として起きる場合があるが、それさえ例外と言える範囲だろう。

「あの子達には荷が重いかもね、人殺しなんて。でもこれも幻想郷

の為だわ。その手を血に染めてもらいましょう」

意味が分からない、しかし子供が人殺しなどしたらいけない事は分かっている。

「いったいどういうことです。なんで異変解決に人殺しが関係あるんですか」

「簡単よ。今回の異変の首謀者が人間ってだけ」

「それこそ分かりません。人間には異変を起こす理由も、力もある訳ない」

確かに人間の中にも恐ろしい能力をもった者がいる。しかし所詮は人間だ。そんな事をすれば待つのは能力酷使による死か、妖怪の餌食になるだけだ。

「くえん、それでも異変は起きてるのよ」

「仮にそうだとしても、妖怪や神が解決すればいいじゃないですか」

「妖怪は人間を裁かないわ。神も似たようなもの」

確かにそうだろう、妖怪は人間を裁くことなんてしない。神だって見守り、導くものだろう、いや神に関しては紫が借りを作りたくないだけだろうが。

「それにこの異変は貴方のせいでもあるの。貴方が人間を殺した道具がどういう物か知っているかしら」

いつも身に付けているナイフに触れる。これには能力が宿っている『色に染まらない程度の能力』色に染まらないということは何事にも影響されない事だ。俺は危惧していた、仮にあの日殺し損ねた人がいたらナイフの影響を受けているのではないかと。今まで色々な経験によつて染まった色が落ち本来の色を取り戻すではないかと。その結果能力が生まれるのではないかと危惧していた。そしてそいつが幻想郷にいつか現れるのではないのではないかと。

「それでも貴方は彼女達に異変解決を任せるかしら」

妖艶な笑み、それはまさに妖怪そのものであった。俺が断れないことを知った上での要求だ。俺は首を縦に動かすという選択しかなかった。

「わかりました、引き受けます」

「ふふふ、よく引き受けてくれたわ。それじゃ早速お願いね」

俺はまた浮遊感と共にスキマに落ちて行つた。

- 幕間 -

僕は昔大切な人を守ることが出来なかった。そいつは僕の友達で半身、そして初恋の相手だったかもしれない。それが実際のところ初恋なのかどうかはわからない。あの日から彼女は目を覚ますことなく病院のベッドの上で眠っている。6年前の10歳の姿のまま。医者にも理由は分からないらしい。姿が変わらない彼女と違い僕は今年の春から高校に通い始めていた。16歳になった僕と、10歳のままの彼女には大きな隔たりがある。その隔たりが僕の気持ちをよく分らないものへと変えてしまった。それでもほぼ毎日病院に

通う僕が彼女に囚われていることには違いなだろう。それが恋なのか、守れなかった償いなのかはわからない。

「あら、くろ君また来たの」

毎日のように病院に通っている僕は看護師にすっかり覚えれ、こうしてあだ名で呼ばれる仲になった。

「はい、もう習慣ですから」

看護師に挨拶をしながら彼女の病室に向かう。こうして彼女の病室に向かうのは僕以外では医者か看護師程度のものでだ。両親さえ彼女の見舞いにはもう来ない。彼女の生体維持に掛かる多額の費用のせいで厄介者扱いなのだ。世間対の為だけに生かされている。それが今の彼女だ。

「よ、来たぜ」

返事が返って来ないのは知っているのに、こうやって僕は彼女に話しかける。望んでいるのだから返事が返ってくることを。

考察

俺は魔法の森を充ても無くさ迷っている。紫はどこでどんな異変が起きているのかさえ教えてくれはしなかった。ただあの日、異変解決を引き受けた日、俺はここに落とされた。紫のことだ、ここに何かがあるから落としたのだろう。ヒントとも言えないヒントに頼りして3日続けて森に分け入っている。そのせいで毎日店は休業中だ。商売上がったりとしかいえない。

まだ5月初めの森の奥は日光も届かず冷たい空気が流れていた。どこか寂しい空気だ。こんな陰気な所に住むという魔女はよっぽどの変わり者だろう。そういえば霧雨の娘さんもここに住んでいるらしい。確かにこの瘴気に溢れた森は魔法の修行に適している。だが大抵に人間、妖怪では瘴気に当てられてしまう。ナイフの能力で『色』を無くしていなければ、大人の俺だって倒れてしまっているだろう。ただの里の娘だった子がこんな所に住んで大丈夫なのだろうか、ついでに彼女に会ってみる事にした。

そんな訳で森の奥に進みすぎた俺は絶賛遭難中だ。完璧に方向感覚を無くしいったい何処を歩いているのかさえ分からない。真っ直ぐ進んでいるつもりなのだが、どうもグルグル回ってしまっているらしい。道に迷うのは妖精の悪戯、よくそんな事を言われるが『色』を無くしている俺には関係ない。つまり俺が純粹に方向音痴なだけだ。例えば、幻想郷に来たばかり頃、地下の旧都で散々迷った挙句に勇儀に発見され酒に付き合わされた記憶がある。あの時は道に迷った事よりも飲まされ過ぎた記憶しかない。なんでウイスキーをボトルごといったのだろうか。たしかさとりとの事を聞かれて、誤魔化すために。

「おつ檸檬じゃないか」

そんな昔の話を思い出している時に、突然背後から話しかけられた。俺の事を店の名前で呼ぶのは霧雨の関係者しかない。そしてこの森で俺の事知っているのは。

「霧雨の嬢ちゃん、お久しぶり。にしてもよく俺を覚えてたな」

案の定、霧雨 魔理沙だった。探すつもりで森の奥に向かったが、まさか本当に出会うとは思っていなかった。それより驚いたのは俺の顔を覚えていたことだ。店を出す時に彼女の父親にお世話になった。その時に軽く顔を合わせた程度だった俺を覚えていたのは驚きだ。

「外からきた奴なんて珍しかったからな。なんだお前全く老けてないな、妖怪にでもなったのか？」

色を無くし変化を無くした俺と違い彼女は俺の記憶よりも成長していた。小さく生意気そうな短髪だったが、今は身長も伸び髪も伸ばしていた。身長に関してはそれでも歳にしては小さいが。

「いや、まさか。ただ若作りをしてるだけだよ」

少し嘘を付く。

「そーか。で、こんな所にどうして来たんだ」

異変の解決の為、そう素直に答えないほうがいいだろう。彼女は巫女の真似事で異変解決をしているのだ。そんなことを言えば絶対に解決しようとするだろう。紫には何も聞いていない。一体どんな奴

がどんな異変を起しているのかは。それでも彼女は人殺しになると言っていた。そんな事に彼女を巻き込むわけにはいかない。

「霧雨の親父さんに嬢ちゃんの様子でも教えてやるかなって」

「もう私と霧雨の家は関係ないぜ。それに親父の方から勘当したんだから、親父も私なんかに興味ないだろ」

彼女は勘当されている。詳しくは知らないが、父親は娘が魔法使いになるのは反対だったらしい。そして彼女は家を飛び出した。それでも魔理沙は霧雨の姓を名乗り、父親を名前ではなく親父と呼んでいるあたり、まだ父親が好きなんだろう。そして認められたい想いも有るのだろう。

「そうか、親父さんに恩でも売っておきたかったんだけどな」

そこを突っ込むのは野暮だろう。

「檸檬、ついでだから家にでも寄っていくか？ 最近は森の様子もおかしいし」

様子がおかしい、おそらく異変の事だろう。ここは少しでも情報が欲しいところだ。

「どうしたんだ？」

「茸とかをとっている時とかに、掴んだと思ったらそれが消えるんだよ。今日だって籠いっぱいの茸が消えてしまったんだぜ」

物が消える異変、そう考えるべきだろうか。

「多分茸の胞子が増えたのが原因だと考えてるけど、晩飯のおかずが消えるのは勘弁だぜ。」

この森には茸の胞子が溢れている。それが瘴気であり、入った人間に幻覚を見せ、体調を崩す原因だ。仮に物が消える異変ならば、気づく者は少ないだろう。ここで物が消えてしまっても幻覚を掴まされてしまったと勘違いをするのが普通だ。だから異変が起きているのに巫女も魔理沙も動いていないのだろう。気づくことの無い異変、妖怪はそんな事はしない。妖怪が異変を起すのは存在の証明だ。これは人間が起した異変で間違いない、つまり紫は嘘を付いていない。

「そうか、なら早く里の帰ったほうがいいな。俺はこの瘴気に慣れている訳でもないし。悪いけど森の外まで案内してくれないか？」

「いいぜ。今晚は香霖の所で晩飯食べるつもりだったしな。晩飯には早いがついでに案内するぜ」

- 幕間 -

最近よく白昼夢を見る。白昼夢は、目覚めている状態で見る現実味を帯びた非現実的な体験や、現実から離れて何かを考えている状態を表す言葉。ようは幻想だ。僕は幻想に悩まされている。今だって、彼女が僕の周りを漂って笑っている。これは夢なんだ、だが夢でも彼女と一緒にいられるのが嬉しかった。現実の彼女はもう笑ってくれないのだから。そして彼女を無くした悲しかった記憶ではなく、楽しかった記憶を思い出すことができる。だが一緒にあの日のことも思い出してしまう。あまりにも彼女の笑顔があの日のもとの重なってしまつて。

6年前僕らの街に死神が現れた。梅雨前のまだ冷たい雨の中僕らは一緒に帰っていた。たしか駅前商店街から帰っている途中だった。今でもはつきり覚えている。向かいから手を真つ赤に染めた黒いコートを着た男が現れた。僕の頭はそれが何なのか処理出来ずに立ちすくんでしまった。それが間違いだった。すぐ彼女の手を引き逃げればよかったのだ。そして立ちすくんでいる僕の横で彼女が切りつけられた。僕は倒れていく彼女を受け止めることしかできなかった。それを見た大人たちが男を取り押さえようと向かったが、彼らはあつけなく切り殺されてしまった。彼女の血と彼らの血を浴びながら僕は彼女を抱きかかえることしか出来なかった。そして彼女はそれから目を覚ますことは無かった。

その後も男は止まることもなく、死者21名、重傷者1名という日本犯罪史上に残る事件となった。メディアはこぞつてこの事件を『死神通り魔事件』として特集した。猟奇犯、宗教、社会への反抗、いろいろな憶測を飛ばして騒ぎ立てた。しかしそれは憶測のまま解決しなかった。男『紀伊呂 くん』は逃亡したまま6年の月日がたった。あれだけ騒ぎ、面白がった事件も今では忘れ去られ話にもあがらない。僕は怖かった、こつやつて事件が、死んでいった人たちが、彼女が幻想になってそまうのが怖かった。もしかしたら僕が白昼夢に取り付かれたのはそのせいかもしれない。夢のよう消えて欲しくないから、彼女の夢をずっと見てるのかもしれない。

宴の前に

俺は魔理沙と分かれた後、里には帰らずに地霊殿に向かった。地底へと繋がる穴の近くには誰も近づくことはない。人間はもちろん、妖怪でさえ。人間は恐ろしい妖怪が出ると恐れて、妖怪はかつてに支配者の鬼を恐れて。それ以前に紫によって妖怪は地底に向かうことは禁じられている。こうやって地底に下りる者は俺ぐらいものだ。本当は地底で暮らしたかった、しかし地霊殿の主であるさとり、地底のまとめ役の勇儀はそれをよしとしなかった。俺には地底は居心地が良すぎるのだ。妖怪しかいなく、元地獄という土地は罪に汚れた俺の心を癒してくれる。人間という立場を忘れてしまうほどに。だから俺は地底ではなく人里に暮らすことが進められた。本当に鬼に堕ちきらないために。

「あら、また来たの？」

地底と地上を繋ぐ橋にいつものように水橋　パルスイがいた。橋姫と呼ばれる妖怪だ。はるか昔に夫に裏切られて憎悪と殺意に駆られるあまり川に身を浸し、生きながらにして鬼に堕ちた人間らしい。本人から聞いたわけではなく、あくまでも噂話なのだが、俺にとっては親近感がわく相手だ。

「ちよつとね。さとりにでも晩飯たかろうって思ってた」

「妬ましいわね。そんな相手がいるなんて。別に通ってもかまわないけど、騒ぎは起さないでよ。またあんなのに巻き込まれるのは御免だから」

「はいはい、了解です」

ひらひらと手を振り別れをつげた。どうも前のことを怨まれているらしい。吸血鬼異変を解決して傷も癒えた俺は例のごとく勇儀と飲んでいた。俺は毎回、勇儀と飲むと悪酔いをする。いや、勇儀が悪いのだ、人間の限界近くまで飲ませ続けるのが原因だ。その日は地霊殿で勇儀を含め、さとり、彼女のペットのお空と喧嘩したはずだ。妖怪と飲んでいた。確かさとりのペットのお空と喧嘩したはずだ。理由は酔っていて覚えていないがさとりに関係した事だったと思う。勇儀のちゃちゃでいっそう喧嘩は白熱し、ついに周りにも被害がでた。その相手がパルスィだ。結局パルスィによって喧嘩両成敗された。記憶が鮮明に覚えているのはお空と共に正座でさとりに説教されているのと、それを見て爆笑する勇儀だ。こうやって思い出すと確かにパルスィには悪いことをしたとは思う。だが結局は勇儀がおったのが原因なきがする。

なんて思い出していたら、地霊殿にたどり着いていた。門をノックもせずに俺は中に入っていく。いつ来ても思うが、地霊殿は広い。玄關ホールだけで俺の家の数倍はある。紅魔館も負けない広さがある。そして悪趣味さでも負けていない。紅魔館は目が痛くなる程真っ赤、地霊殿は西洋風の外観で、黒と赤のタイルで出来た床、ステンドグラスの天窓と本当に趣味はいい。しかし主であるさとりの妹、こいしが飾っている死体で台無しだ。こいしは気に入った死体を飾る趣味がある。子供が蟻を殺すのと似たようなものだろうが、ダイナミックすぎる。それに「くえんお兄ちゃんの死体も飾りたいから早く死んでね」とか彼女から言われている身からしたら、こんな趣味なくして欲しい。さとりもペットや俺には厳しいが妹には緩い。そのせいでこの悪趣味だ野放しになっている。機会があればこれをどうにかしたい。本当に。

「さとり、来たぞー。勝手に上がるぞ」

返事も待たずにかずかと奥に進んでいく。そしていつもさとりが
いる広間に向かった。しかしそこにはさとりは居なかった。

「入れ違いか……。じゃあ勝手に始めさせてもらいますか」

部屋を漁って、酒を探し始める。いつもなら探せば飲める物が出て
くるが、今日は出てくるのは苦手なお酒ばかり。無理に飲んでも悪
酔いするだけだ。ここは諦めてさとりが帰って来るのを待つか、こ
そそしている子を捕まえて酒のありかを聞くべきだろう。

「なあ、こいしちゃん他の酒って無いの？」

後ろを向き何も無いはずの空間を見詰める。多分だがここにいる、
さとの妹のこいしが。見えないし気配も無いが、つまりは彼女は
色を無くしている。だからこそ俺にはそこにいるのがわかる。

「やっぱりお兄ちゃんにはバレちゃうか」

ずっと色が付き、1人の緑色の髪の少女が現れた。古明地 こいし
だ。姉であるさとりよりも発育がよく彼女よりの年上に見えるが中
身は無邪気な子供だ。無邪気すぎて死体を飾ってしまうほどに。

「忍者こいし、お前の能力では俺を欺けない」

彼女の能力は『無意識を操る程度の能力』俺自身能力などに詳しく
ないが、無意識を操り他人から認識されないように出来るらしい。
青い狸型ロボットの道具でいうならば、『石ころなんか』といっ
たところだろう。

「つまんないの。お兄ちゃんが好きなお酒ならいいわよ。お姉ちゃんが切らしたとか言ってたし」

なんともタイミングが悪い。せつかく足を運んだのにさとりもないければ酒もない。

「で、どうしたの？ 突然来るのはいつものことだけど」

「ん、ああ別に理由はないけどね。ただ大きい仕事の前にさとりと飲もうと思ってるね」

「ふーん。じゃあしばらく待ってたら帰ってくると思うよ。お酒とか食べ物とか買いに行ってるだけだし」

じゃあ、と手を振り消えてしまった。おそらくいつものように無意識の赴くままに幻想郷をふらふら散歩でもしに行ったのだろう。俺は1人になった。ペット達と遊んでもいいが、おそらくこの時間だとまだ灼熱地獄や怨霊の管理を忙しくしているのだろう。

俺は適当な椅子に腰掛け、そしてタバコに火を灯す。明日から本格的に異変の調査を始める。おそらく近いうちに異変の首謀者と遭遇して戦いになるだろう。ただの人間が吸血鬼より強いことはないだろう。また怪我をするだろうが、死ぬことはまず有り得ない。だが俺は首謀者を殺すことが出来るのか。紫はやたらと人殺しという言葉を強調していた。つまりは殺さないといけない対象なのだろう。俺はまた罪を重ねることが出来るのか、俺にはわからない。もしかしたら迷いを持ってしまい逆に殺されてしまう可能性だってある。俺にはわからない。だからさとりに聞きたかったのだ。俺は本当はなにを望んでいるのかを。

俺はタバコの煙を吐き出す。

- 幕間 -

僕はついに気が狂ったのかもしれない。最近白昼夢のせいか眠れなくなってしまうた。夢は起きていた時の記憶を整理するためにあるらしい。白昼夢を見続ける僕には眠りが必要でなくなってしまうたのかもしれない。しかし眠れないということは僕の精神を崩壊させるには十分だった。もう何が白昼夢で何が現実かが分からなくなってしまうっている。だから突然こんな見慣れない森に迷い込んだ時俺は安心した。ついに僕は眠ることができて、夢を見ることが出来たのだと。

肌寒い森、そこには見慣れない茸が生えている。そのくせ動物がいるような気配は全くない。ただ森があるだけで何も無い。ここの外に出たら何かあるのかもしれない。しかし出てしまったら夢から覚めてしまう気がして僕は森の奥に止まり続ける。夢から覚めたらまた辛い現実と向き合わないといけないのだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4580t/>

宇宙檸檬

2011年10月7日00時47分発行